

弘前藩の刑法典 (十七) — 寛政律 —

橋本久

目次

はじめに

一 安永律

付1 『御刑罰御定』 (安永律)

〔第六号〕
〔第十三号〕

付6 『要記秘鑑』三十三 安永四年八月二十六日条

〔第二十号〕

二 寛政律

(一) 『御刑法書之写』

〔第七号〕

(二) 『寛政律』 (その一)

〔第八号〕

(三) 『寛政律』 (その二)

〔第十一号〕

(四) 『寛政律』 (その三)

付2 『隠商過料定牒』

付3 『人別方御用取扱条例』 『人別調方取扱条例』

〔第十三号〕

(五) 『寛政律』 (その四)

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

〔第十四号〕

(六) 『寛政律』 (その五)

付4 『諸取引御触書』 『公義御書付留』 『公義御触書留』

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』

(七) 『寛政律』 (その六)

〔第十七号〕

(八) 『寛政改正御刑法帳』

〔第十九号〕

(九) 『寛政改正 刑律』

〔第二十号〕

付6 『要記秘鑑』三十三 〔第十七・十九・二十号〕

料

(十) 『寛政九年 刑法』 [第二十一号]

(十一) 『法律秘略』 [第二十二号]

付7 『要記秘鑑』三十四 [第二十一・二十二号]

(十二) 『寛政律』 [第二十三号]

付8 『御用格』二十一 [第二十五号]

(十三) 『和律』 [第二十七号]

付9 『御用格』二十二 [第二十九号]

(十四) 『御用法嘆』 [本 号]

付10 『御用格』二十三・二十四

(十五) 『刑律』 [本 号]

(十六) 『旧津軽藩 刑法』 [本 号]

補訂2 『隠商過料定牒』 [本 号]

三 文化律

(一) 『刑法』

(二) 『御刑法嘆』 (その一)

(三) 『御刑法嘆』 (その二)

(四) 『御刑法帳』

二 寛政律

(十六) 『旧津軽藩 刑法』

凡 例

一 原本は弘前市立弘前図書館所蔵本(K三三〇一―二二四)を用いた。

一 字体・字配りは、できるかぎり原本にしたがった。異体字・変体仮名については、かならずしも原本通りではない。

一 原本塗抹は元字の左にくを付し、右に訂正文字を記した。朱による書入、抹消は「朱」「朱抹」で示した。

一 原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すために「をくわえた」。

一 原本の丁数・表裏を各終行末に「」で示した。一 便宜上、(一)～(十五)に做い、各項目に「一、二、三、……、」

各条文に仮番号1、2、3、……等の数字を付した。一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。

旧津輕藩
刑法

目録

- 〔一〕 一戸ノ之次第
- 〔三〕 一同追放之次第
- 〔五〕 一死刑之次第
- 〔七〕 一五逆之事 但惡逆不道大不敬不孝不義
- 〔八〕 一老幼癡疾之事
- 〔一〇〕 一人^をて二罪有之事
- 〔一一〕 一五軒組合列座^ニ可及ケ條之事
- 〔一二〕 一科人自身申出候者
- 〔一三〕 一親族ハ罪を隠御用捨之事^{ル而も}
- 〔一四〕 一親族輕重之事
- 〔二〕 一鞭刑之次第
- 〔四〕 一徒刑之次第
- 〔六〕 一贖刑之次第
- 〔九〕 一科人ハ首從^を可分事

(縦 24.3 cm 横 16.7 cm)

- 〔一五〕 一罪可減者果減^ルを得る事
- 〔一六〕 一婦人犯罪之事
- 〔一八〕 一同類之内出奔有之片口相成候者之事
- 〔一九〕 一罪科加減之例
- 〔二〇〕 一闕所之事
- 〔二二〕 一人を謀而殺候者之事
- 〔二四〕 一親族之謀殺
- 〔二六〕 一姦因而夫を殺者
- 〔二八〕 一頭分之者謀殺致候者
- 〔三〇〕 一打擲^マて人を殺者
- 〔三二〕 一夫有罪之妻妾を殺もの
- 〔三三〕 一人を過て死に致者
- 〔三五〕 一喧嘩打擲ハ疵の輕重を以罪を迎候事
- 〔三六〕 一疵療治之事
- 〔三七〕 一勢を以人を縛り打擲致し^ル者
- 〔三八〕 一下人主人を打擲致^ル者事
- 〔三九〕 一妻妾夫を打擲致^ル者之事
- 〔四〇〕 一兄弟の打擲
- 〔四二〕 一父祖人ニ被打擲其子孫返打之事
- 〔四三〕 一竊盜之事
- 〔一七〕 一不義之財物取捌之事
- 〔二一〕 一取押物之事
- 〔二五〕 一謀而親を殺^ル者
- 〔二七〕 一家三人を殺候者
- 〔二九〕 一咒詛毒藥之事
- 〔三一〕 一怪我^マて人を殺者
- 〔三四〕 一人殺之者内濟致候者
- 〔四一〕 一師匠を打擲致^ル者
- 〔四四〕 一御城中へ入盜致^ル者

- 〔四五〕 一自分預り之物を私曲致ゆる者 〔一ウ〕
- 〔四六〕 一御藏之財物を盜取ゆる者
- 〔四七〕 一強盜
- 〔四八〕 一白晝人の物を搶奪之者 〔四九〕
- 〔五〇〕 一馬盜 〔書人〕
- 〔五一〕 一流失流木盜揚之者 〔二火附〕
- 〔五二〕 一田野之穀物盜取ゆる者
- 〔五三〕 一夜中無故人家へ入ゆる者
- 〔五四〕 一盜人の宿致しゆる者 〔五六 脱〕
- 〔五五〕 一入墨を抜取ゆる者 〔五八〕 一謀書謀判致ゆるもの
- 〔五七〕 一役人を似せゆる者 〔六〇〕 一似せ金銀を造ゆるもの
- 〔六一〕 一枉法賄賂之事 〔六二〕 一不枉法賄賂之事
- 〔六三〕 一坐贓之事 〔六四〕 一賄賂の約諾致ゆる者
- 〔六五〕 一賄賂を行ゆる者之事 〔六六〕 一茂合取立私曲致ゆる者
- 〔六七〕 一隠田畑 〔六八〕 一田畑質入
- 〔六九〕 一田畑之押領之事 〔七〇〕 一御収納遲滯 〔二オ〕
- 〔七一〕 一内借
- 〔七二〕 一手越ニ訴状差出ゆる者之事
- 〔七三〕 一無名之訴状之事

- 〔七四〕 一不實之事訴状致ゆる者之事
- 〔七五〕 一親族相訴ゆるもの
- 〔七六〕 一子孫父母の教ニ背ゆる者
- 〔七七〕 一訴訟之腰押致ゆる者 〔七八〕 一強訴之事
- 〔七九〕 一隠津出之事 〔八〇〕 一隠荷揚之事
- 〔八一〕 一隠商賣之事 〔八二〕 一博奕之事
- 〔八三〕 一御用事を頼合致ゆる者之事
- 〔八四〕 一人の罪を輕重致ゆる者之事 〔八六 脱〕
- 〔八五〕 一失火之事
- 〔八七〕 一御觸ニ背ゆるもの 〔八八〕 一不可為義を致ゆるもの
- 〔八九〕 一科人手向致ゆるもの 〔九〇〕 一科人出奔之事
- 〔九一〕 一科人を隠ゆるもの 〔九二〕 一私ニ升秤を造るもの
- 〔九三〕 一御閔所忍通ゆる者
- 〔九四〕 一立帰りの事 〔九五〕 一馬札紛失之事
- 〔九六〕 一姦淫之事 〔九七〕 一僧尼犯姦之事 〔二ウ〕
- 〔九八〕 一下人家長之妻女を姦ゆる者
- 〔九九〕 一相對死之事 〔一〇〇〕 一隠遊女之事
- 〔一二行空白〕 〔三オ〕
- 〔三ウ〕

覚

此度御刑法御改被仰付ルニ付沙汰仕、処明律ハ歴代之刑法を致損益^①相立ルニ付律之輕重宜義理共ニ^①正しく御座^①得共當時に比^①得者一^①體之律重^①御座^①問明律^①答罪ニ相當^①ル部ハ大方當時戸^①メ^①て相^①濟^①振合ニ御座^①而猶又刑法も違^①ハ間其儘^①ハ難相用依之當時通例行^①刑名を以明律之格に隨^①ひ差等相立専ら其義理^①依り輕重相分申^①右之^①内^①公義御定^①ニ拘り^①儀并是^①迄之御法ニ而俄^①輕重難相成分^①得沙汰^①對酌^①加減仕候間此末御刑罰御沙汰御座^①而若此度相定^①ハ條之内^①洩候儀御座^①而も右之趣を以^①て明律を致參考罪之輕重無之樣被仰付^①ル様奉存^①即^①此度相定^①御刑法名目と明律刑名と^①之^①の相當之差等如左^①

戸 ^① メ	明律答刑
五日	十
十日	二十
十五日	三十
二十日	四十
三十日	五十
鞭刑	明律杖刑

[四オ]

三	六十
六	七十
九	八十
十二	九十
十五	一百
鞭刑追放	明律徒刑
十八所拂	一年 ^杖 六十
廿一三里	一年半杖七十
廿四五里	二年杖八十
廿七七里	二年半杖九十
三十拾里 ^①	三年杖一百
大場御擗	[朱]「町奉行格帳ニ」
点羽	「大場四浦五浦木造飯詰板柳浅虫黒石」
	「(三御通地碇ケ関青森鱒ヶ澤)」
〔欄外〕「コノ点羽頭書ニスベシ」	
徒刑	明律流徒 ^刑
半年鞭三十	二千里杖一百
一年同三十	二千五百里杖一百
一年半同三十	三千里杖一百
死刑	明律死刑
斬	

[四ウ]

料

獄門

斬秋後

〔五オ〕

(下) 火刑

火刑ハ火附を極之重科ニ相立ル公義御定ニ付明律相當なし〔朱〕④〔無云之〕

(上) 磔

斬即決

過料人夫或ハ一日④之六十文積を以過料錢差出候事
〔欄外〕
戸メ五日
戸メ十日
戸メ……
右ノ如ク一行ニ排列スヘシ次キノ鞭刑、徒刑、死刑皆同シ

〔欄外〕「以下刑法ノ明文也」

御刑法御定

定例

御刑法名目

戸メ五

(点羽) 戸メ之儀是迄ハ日數幾日ニ相成ル間御免被仰付
縁
ル処申上ル得共已來幾日 日戸メ被仰付ル様ニと日數を記
し申上ル義辰八月伺濟

〔欄外〕

「コノ点羽頭書ニスベシ

戸メ五ハ次キ

ノ戸メ五日云々

ト同頭ニナルベシ

「△ニ入ルベシ」※

戸メ

五日

十日

十五日

廿日

三十日

〔朱抹〕④之ナシ

但子兄弟或ハ奉公人之類戸メ難相成者ハ右之日數之通

〔五ウ〕

※〔欄外〕
④左の頭書事共上前

と同じく点羽なるべし

在方之者共戸メ被仰付ル〔朱〕而ては農事差

障並御締合ニ相成不申ル間以來戸メ御

止被仰付過料上納ニ被仰付

ル事 但弘前町續並九浦

町續ハ戸メ被仰付然ル共

其事〔朱〕寄ニより過料上納被仰

付ル事尤村方ニ而も郷土

手代之類又ハ大場重立之者ハ戸メ尚又

村役之儀も其品により戸メ被仰付ル事

〔一八三三〕
文化十四年十二月被仰付ル事

戸メ之儀是迄ハ日數幾日ニ相成ル間 御免

被仰付、様申上ル得共以來

ハ幾日戸メ被仰付、様ニと數
を記シ申上、事 辰八月何濟」

二 鞭刑五

鞭三 同六 同九 同十二 同十五

三 鞭刑追放

鞭十八所拂 同廿一三里 同廿四五里 同廿七七里

同三十里大場御構」

但追放ハ鞭十八〔朱〕以上ニハ得共其罪之子細〔朱〕其所にニ寄難差置

者ハ鞭數ニ不〔朱〕拘抱〔下ケ札〕所拂可致事

前〔下ケ札〕より之例

追放者之儀居村並九浦町端ニ而鞭刑被仰付ハ而も何れ

四方と申儀ハ弘前より何里四方と申事

但居町居村之儀ハ右里數之外ニ而も徘徊不相成事

右ハ鞭刑追放ノ條ノ頭書トスヘシ」

四 徒刑三

徒半年鞭三十 同一年同三十 同一年半同三十

但徒刑之者銅鉛山〔朱〕江ニ差遣鞭刑之上年限之通苦使可致

事〔欄外〕

〔徒刑之者苦使御止被仰付右代リ牢居日數左之通

一徒半年 牢居百日

一同一年 同二百日

一同一年半 同三百日

一同二年 死罪代リ 同五百日

文化八未年何濟」

五 死刑四

斬 獄門 磔 火刑

〔六才〕

六 贖刑

鞭三ハ 過料三メ六百元

同六 四メ二百文

同九 四メ八百文

同十二 五メ四百文

同十五 六メ文

同十八 十二メ文

一一九

同廿一	十五メ文
同廿四	十八メ文
同廿七	廿一メ文
同三十	廿四メ文
徒半年	三十メ文
同一年	三十三メ文
同一年半	三十六メ文
死罪	四十二メ文
右過料ハ老幼癡疾之類刑ニ不被行者并過ニて人を殺或	
ハ疵付相ニ當ル過料ニ而罪を贖せ可申事	
一過料之者若貧困ニて上納難相成ルものは銅鉛山ニ	
差遣一日六十文之積ニを以夫役ニ使ひ可申事老幼癡疾	
之類夫役にも難相成ものは其身牽舎ニ之上一年或は二	
年ニて用捨可致事	
〔朱〕而	
〔欄外〕	
〔戸メ過料〕	
五日	六百文
十日	九百文
十五日	一メ二百文
二十日	一メ五百文

- 三十日 一メ八百文
 〔一八〇△〕
 文化五辰年同
 濟
- 御印紙紛失為過料銀一
 枚上納之上日數五日戸メ墨付ル而も右同様
 右ハ吉沢庄太夫御用番之節相伺被仰付ル
 間以來右之心薄ニ而取扱可申事 卯四月
 〔是前同頭書〕
- 勘定奉行裏印手形紛失之者為過料銀五匁上納被仰付旨惣
 觸有之由事 文化六己巳年十二月
 〔朱〕御剪紙紛失為過料銀一枚上納之上日數五日戸メ墨付ル而
 も右同様
- 七 五逆之事
- 一惡逆
- 祖父母父母を打擲致し或ハ殺さんと謀り并伯叔父姑兄
 姉母方之祖父母を殺し一夫を殺ルもの事
 〔七オ〕
- 一不道
- 一家之内死罪ニあらざるもの三人を殺し并人の支體を
 〔朱〕者
- ①類の者

9

8

10 一 大不敬
切解さむざく殺害」致^①ゆる^①之事

11 一 不孝
御宗廟御節物并御召物等を盜取^①ゆる^①もの^①之事

一 不孝

祖父母父母之事を訶或惡口之父母之扱不^致宜難^並洪せしむ^①るもの^①之事

①者之

一 不義

支配^①ゆる^①もの^①の頭分^①之者殺し弟子として師匠を殺し^①ゆる^①者^①の^①事

13 八 老幼癡疾之事

一 歳七十歳^①已^①上十五歳^①已^①下癡疾^①之者死罪^①已^①下贖^①て^①用捨^①可^①致^①事^①

八十^①已^①上十歳^①以下^①死罪^①を犯^①ゆる^①者^①ハ^①上^①聞^①之上^①時^①宜^①御沙汰

可^①被^①仰^①付^①ゆる^①事^①盜賊^①并^①人^①ニ^①疵^①付^①ゆる^①もの^①贖^①を出^①させ^①可^①申^①事

其餘^①之^①罪^①ハ^①御^①搦^①無^①之^①九十^①已^①上^①七歳^①已^①下^①ハ^①死罪^①ニ^①モ^①刑^①不^①可^①加^①事^①

を

但罪^①を犯^①ゆる^①節^①未^①タ^①老疾^①ニ^①無^①之^①ハ^①共^①事^①頭^①ハ^①節^①老疾^①ニ^①由^①得^①者^①老疾^①を以^①沙汰^①可^①致^①事^①幼少^①之^①節^①罪^①を犯^①壯^①年^①に^①至^①り^①事

14 一 癡疾之事忽而人事よそつれハ片輪病人を云也馬鹿乱心之類も癡疾と可」致事

15 九 科人ハ首従を可分事
一 二人^①已^①上^①申^①合^①犯^①罪^①ハ^①節^①ハ^①其^①内^①趣^①意^①相^①企^①ゆる^①者^①ハ^①首^①と^①致^①ゆる^①事

其餘^①ハ^①從^①と^①致^①ゆる^①事^①從^①之^①者^①ハ^①首^①より^①罪^①一^①等^①を^①可^①減^①事^①大^①本^①文^①ニ^①同^①類^①不^①殘^①と^①阿^①る^①ハ^①首^①從^①之^①差^①別^①無^①之^①事

一〇 一人ニ而二罪有之事

一 凡^①二^①罪^①共^①に^①頭^①ハ^①重^①し^①もの^①一^①ヶ^①條^①を^①以^①罪^①を^①定^①ゆる^①事^①若^①一^①罪^①先^①きに^①頭^①ハ^①れ^①一^①既^①ニ^①刑^①を^①加^①へ^①ハ^①後^①外^①之^①罪^①頭^①れ^①ハ^①節^①ハ^①輕^①き^①もの^①并^①同^①等^①之^①科^①ハ^①御^①沙^①汰^①ニ^①不^①及^①若^①跡^①ハ^①頭^①れ^①科^①重^①く^①ハ^①沙^①汰^①直^①し^①いた^①し^①前^①罪^①之^①鞭^①數^①差^①引^①殘^①鞭^①數^①の^①刑^①を^①加^①へ^①る^①事

一一 五軒組合連座ニ可及ヶ條之事

一 隠田畑 一 隠津出 一 盜杣 一 博奕之宿 一 隠賣買
右ヶ條之内罪を犯ゆるもの組合之ものは本人之罪ニ相當を

以過料ニ直し組合」四軒より差出せし事

〔行間〕①但組合四軒ニ不満者ハ四軒之割合を以不足分

〔朱〕①用捨致し事

〔欄外〕

一 隠田畑

一 隠津出

一 ……

右之通排列スベシ

一一

科人自身申出し者

一二

一 惣而惡事致しもの事未顯_レ已前自身申出ニ於ては其罪御用

捨被_レ仰付し事但人を「底付或ハ物ニ寄不可償品并姦通之

類不許事」

二三

一 竊盜或ハ手段ニ而人の財物を取其後過を悔_レて自身と本

人_ハ返_レしものハ上ニ申出と同前之科可許事

一三

親類ハ罪を隠し而も御用捨之事

二四

一 父母兄弟伯叔父姑夫婦之間罪有之相隠し而も御咎無事但

其事洩逃_レ去志むる共不可罪事家來主人の為ニ隠しも是

又同前之事_ハ其外妻之父母娘之婢夫之兄弟ハ相隠し節

平人より罪三等を減可申事

一四

親族輕重之事

二五

一 本文ニ祖父母とあるハ高祖曾祖同様之事孫とあるハ曾孫

玄孫同様之事嫡_ハ孫承祖ハ父母と同様嫡母養母ハ實母と

同様之事

一五

罪可減ものハ累減を得る事

二六

一 縦ハ罪を犯しもの首と従と有之其從之者ハ罪一等を減し

上其者外ニ可減子細_ハ有之時ハ亦幾等も段々ニ減可申事

一六

婦人犯罪之事

二七

一 婦人之犯罪ハ鞭十五ニ不可過鞭十五已上ニ相當ハ節十五

鞭切_レて残る杖ハ過_レ料ニ而罪を償可申事

二八

一 婦人之鞭刑ハ緋袴之上より打可申事但姦淫之罪ハ衣を去

直ニ可打事竊_ハ盜之類ハ入墨可許事

①を許可申事

〔九才〕

一七

不義之財物取捌之事

29 一財物之上〔朱〕而ニテ罪を犯ル者本人相手共ニ罪有之時ハ其財物

没収可致事若相手〔朱〕上ニ方有罪本人罪無之時ハ其財物本人へ
相返ル事〔朱〕上

30

①其
一財物之没収可致もの并本人へ可相返もの既ニ費し用ルハ
〔朱〕為
償可令出ル事若科人自身之死ル而ニテ品物費用之節ハ取立
ニ不及事

一八

同類之内出奔有之片口ニ相成①者之もの事

31

一 同類之内一人ハ出奔①致し一人召捕ル節其もの出奔〔朱〕致
しゆものを本人之旨申出別ニ証人無之時ハ其ものハ從
といたし刑を加へ可申事其後出奔致ル者〔朱〕而を召捕ル〔朱〕而ニ
明致ル節取初之の本人ニ相違無之ハ則從首と致し殘る刑
を「加へル事

一九

罪科加減之例

32

一 加とハ本罪之上へ猶加へて重く①致したしハ事減と云ハ本罪
之上ニ猶減て軽く〔朱〕に致〔朱〕九ウハ事但減ル節ハ四段之死罪三

罪 段之徒各一等とい致し減ル事鞭刑ニ至而てハ三鞭

宛之一等を減可申事加へル節ハ一段毎に一等と致ル事猶加減又罪ハ

徒一年半」鞭三十限而て加へ之死ニ不可入加て死ニ可入
ものハ其ケ條に其譯斷有之事〔欄外〕

〔朱〕頭書ニスバツ
〔朱〕抹
①〔朱〕而
「鞭刑に至ては三

鞭ツ、之一等を

減可申事

〔日〕己ノ五月相伺〔朱〕濟ハ事

二〇

關所之事

33

一 欠所之事〔朱〕拘ニ以テ科ハ其利欲輕重ニ寄田
畑或ハ家屋敷關家財等欠所可申付ル事重罪不而も利欲ニ不
拘〔朱〕拘ものハ律ニケ條出ル外ハ欠所不可致事〔欄外〕

「諸手足輕中村半

左衛門無調法之義

有之永之御暇追

放被仰付ル節同人

龜甲町ニ所持之家

屋敷御取上之様

町役之者存願申出ル処同人中町

ニ所持之明屋敷ハ御取上ニ相成町方ニ所持之

分ハ御構無之旨尤以來共袴之者町家住居

之家屋敷ハ御構無之無袴之分ハ其罪ニ寄り御

沙汰之事

二二

34

取押物之事

一惣而禁を犯し物を取押儀其懸合役筋之者ニ無之ハハ其

品取押者江被下ニ事其役筋朱取押朱ハハ押物多

少ニ寄御賞被下置其品ハ没收可欄外致候事

凡而犯禁者取

押朱ハハ何役ニ不

拘一統其品朱取押朱者江被下

置朱様同相済

但し山方役人廻先犯禁の木品取

但し山方役人廻先犯禁の木品取

但し山方役人廻先犯禁の木品取

押朱得者其品入札拂不被仰付不被下置

事尤向役人出會見分等而過木等取押朱節右出會江山方役人入加リ

前段同様不被下置朱事八文政元寅八月

十一日朱天保十子年十二月本文御定之通被仰

付朱事

人命

人朱を謀而て殺者

一宿意を以謀朱て人を殺而ももの其張本人ヲ獄門加擔手傳致談

者ハ斬罪加談一計ニ而手傳不致者ハ徒一年半鞭三十

一疵付而計而て不死時ハ張本人ハ斬罪加談手傳ハ徒一年半

鞭三十者一謀殺之奉行而ハ疵付而て不申共張本人鞭三十加談手傳之

者ハ鞭十五者一右之張本人合ハ其場ニ不臨朱共殺朱ハ其身手ニ掛

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

殺而同然疵付而ハ手ニ掛疵付而同然之事加擔之者ハ

其場ニ不臨^得ルハ其場ニ臨^者ルものより罪一」等を許可申

39 ①若^事是^①に依^得而^得〔朱〕
一君^得国之財宝を取^得ルハ強盜之律ニ隨^得ひ張本人加談之差別

無之不殘^得礫但^得」同所之内ニ而も財を分ケ不申^得ルハ謀殺
之律^得ニ擲^得ル事

二三 〔朱〕而^者」
謀^者て親を殺^者ルもの

40 一謀^者て親を殺^者ルもの男女^者ニ不限^者肆^者之者^者鋸引^者婦人^者夫^者ノ父母を
殺^者ルもの同前^者」
〔一〇ウ〕

但鋸引^之之者^致ハ罪次第^致建札^致し於^致往來道路^致肆^致しル事三日
往來^{之日}之者^限勝^日」手次第^日鋸引^日致^日せ右同様^日相濟^日まで鋸引^日致^日ル者
〔朱抹〕④^日ル者^日」
無^日之^日節^日ハ其^日節^日引^日廻^日之上^日礫^日」

41 一弑逆^ハ之^ハ事^ハ既^ハニ行^ハル^ハ得^ハ共^ハ縱^ハ底^ハ付^ハ不^ハ申^ハ共^ハ礫^ハ

42 一親類^者之^者の妻子^者不殘^者遠^者追^者放^者家財^者欠^者所^者但^者子^者も別居^者之^者
ハ御用^者捨^者之^者事^者」

43 一親殺^者之^者者^者於^者自滅^者ハ死骸^者塩漬^者之上^者礫^者可^者致^者事^者」

二四 親族^者之^者謀殺^者

44 一祖父母^者を殺^者さんと謀^者り既^者ニ行^者ひ^者ルものハ獄門^者殺^者ルハ礫^者
引廻^者之上^者」
但母方^者之^者祖父母^者同様^者之^者事^者」

45 一婦人^者夫^者之^者父母^者夫^者殺^者ル^者而^者も右同様^者之^者事^者」

46 一伯叔^兄父^ハ姑^ハ姉^ハ謀殺^者既^者ニ行^者ひ^者ルハ徒^者一年^者鞭^者三十^者疋^者付^者ル^者ハ
獄門^者殺^者ル^者ハ礫^者」

47 一祖父母^者父母^者子孫^者を謀殺^者致^者ル者^者ハ不及^者解^者死人^者徒^者一年^者半^者鞭^者
三十^者」

48 一伯叔^者父^者姑^者之^者甥姪^者を謀殺^者致^者ル兄弟^者之^者弟妹^者を謀殺^者ルものは斬罪^者

二五 〔朱〕而^者」
謀^者て主人^者を殺^者ルもの

49 一謀^者て主人^者を殺^者ルもの男女^者ニ不限^者肆^者之^者者^者鋸引^者底^者付^者ル^者ハ
總^者而^者子^者に^者」
一ノ父母^者と對^者ル^者と」同様^者之^者事^者」

50 一下人^他之^者主人^者を殺^者ル者^者礫^者但^者下人^者主人^者より暇出^江外奉公^者致^者し罷^者
在本^者之^者主人^者殺^者ル者^者」他^者之^者主人^者殺^者ルもの同様^者之^者事^者」

二六 〔朱〕ル者^者」
姦^者ニ因^者て夫^者を殺^者ルもの

51 一妻^之妾^之他^之の人^者と姦通^者いたし因^者て夫^者を殺^者ルもの引廻^者之上^者礫^者姦^者

夫ハ獄門若男之「手段而已」て女其謀知らずといへ共女 雖不知

ハ斬罪又女之手段計て男其謀不知時「ハ只姦夫之刑に 之」

一等を加へて罪に行ひ事

52 一妻妾人と姦通致いたしゆを現在姦通之処ニ而見届即時に殺 於

ゆ者ハ御咎無之「事若其場を立去ゆ浚訴も無之檀に殺ゆ 檀

者ハ「朱」而「もの喧嘩」て人を殺ゆと同様之事

二七

一家三人を殺ゆ者

53 一一家之内非死罪人の三人を殺并人之支體を切ほどきむ者ハ

く殺害致いたしゆ「もの引廻之上襍家財欠所死者之家へ被 闕

下ゆ事」「一ウ」

妻子ハ遠追放加談致しゆ者手傳致ゆもの共獄門 者ニ

但追放之事別居之子ハ御用捨之事 「朱」儀

二八

頭分之者謀殺「朱」をいたしゆ者

54 一支配之者頭分之者殺さんと謀り既に行ひゆハ徒半年鞭 得

三十疋付ゆハ斬罪「殺ゆハ磔 得

二九

咒詛毒藥

55 一咒詛調伏等を以人を殺と謀ものハ謀殺之律を以罪行ゆ事 二〇

若只人を苦めんと謀ゆハ二等を減ゆ事毒藥用るも同様 者

之事毒藥を買未用もの鞭三十「其事を知り藥を賣ゆ者同 者

罪不知時ハ御咎無之

三〇

打擲「朱」而て人を殺ゆもの 者

56 一元より巧みて殺ゆハ無之一時ニ喧嘩打擲ニ而人を殺ゆ 者

ものハ斬罪尤相手」之方理不盡之致方ニ而不得止事於殺 者

害ハ相手の方親類名主詮議之上被殺「ハ二オ」ゆ者平日不法之者 者

ニ相違無之ハ、死罪二等を減可申事 致「朱」之

57 一同謀て人を打擲「朱」一年半いたし因て死ニ至りゆハ急所之疵を得 者

させゆものを解死「人ニ可致事但最初事を企ゆものハ徒 者

半年鞭三十餘の人ハ何れ鞭十五 者

三一

怪我「朱」而て人を殺ゆ者 者

58 一怪我「朱」而て人を殺或ハ疵付ゆもの打擲之律に因て償を取其 者

ものニ被下置ゆ事」
者

59

一途中馬車にて人を過ちゆ者緩急之事無之者怪我を以沙汰
可致事若「不慎之義於有之ハ打擲之律を以刑を可加事
「朱」而「朱」儀

60

一危き仕業を致し因而人を殺ゆ者償ニハ難相成打擲之律を
以刑を加へ可申事」
可

61

一喧嘩等ニ而因て傍の人を殺底付ゆもの喧嘩にて人ニ底
付と可為同前事」
然

62

一若又強而人を殺さんとして過て別人を殺底付ゆもの謀殺
を以沙汰」可致事
謀

三二

夫有罪之妻妾を殺ゆ者
「並」
「一二ウ」

63

一妻妾夫の祖父母父母を打擲等により其夫打之因而死ニ至
リゆハ御擣無之」若又強て擅ニ殺ゆハ鞭十五但外之
罪等ニより打殺ゆハ可為解死人事」
得

64

一夫妻妾を打擲或ハ罵等致ルニ寄其妻妾自害之者不及御沙
汰事」
①殺ゆ

但重き底等負せぬ節ハ夫妻妾を打擲之律ニ依て沙汰可
致事」

三三

人を逼て死を致ゆ者

65

一事ニ依て人を逼り其人自殺致ゆもの鞭十五并金貳両出さ
しめ死者之家へ被下」ゆ事若矣を行盜を致しゆ為人を逼
リ死ニ致ゆものハ獄門
者

三四

人殺之者を内済致ゆ者

66

一祖父母父母を人の為ニ殺され其子孫内済ニ致ゆもの徒一
年半鞭三十五夫被」殺を内済ゆしゆもの同然伯叔父姑
兄弟ハ二等を減可申事若子孫人」の為に被殺祖父母父母
内済致しゆもの鞭九常人の内済ハ鞭三」
者

67

一内済之為贖を取ゆものは錢の高を以竊盜に準し重き方に
て沙汰可致」事 但父母被殺贖を取ゆものハ死罪
者

68

一同居或ハ同行之人初より其人を謀て害せんとする事乍存
不留者なら」ひ被殺ゆ後不訴もの鞭十五
者

三五

喧嘩打擲ハ底の輕重を以罪を迎ゆ事
打擲

69

一手足或ハ外の物を以打擲致ゆもの戸メ十五日底付ハハ
者

戸ノ廿日

但打〔朱抹〕所不破〔朱〕も青赤ニ腫疵れを疵疵と定疵れ事

70 一血鼻口の内より出或ハ内損血を任疵れ者鞭九不淨之物を以

之疵の頭面を汚疵れもの右同様之事

71 一齒或ハ一枚手足之指一本を折一目を傷并耳鼻を傷疵れ者鞭十五

湯火を以人を傷疵れ者不淨を以人の口鼻ニ入疵れも同様之事

事

72 一齒以杖指以本已上を折疵れ者ハ鞭十八

73 一人之骨を折并兩目を傷疵め或ハ婦人の胎を墮し并一切之刃

物之切疵底ハ鞭二十四
〔一三ウ〕

但兵器以朱ハニ而柄以朱を打以朱れ者刃物ニハ無之事

74 一手一本足一本を折或ハ一目を潰疵れしもの鞭三十

75 一兩手足を折或ハ兩目を潰疵し或は持病等有之朱因朱て瘡疾朱に

至らしむ疵る者并人ノ陰陽を傷疵れ者徒一年半鞭三十右科

人家財半分を以疵付朱れ者朱被下朱れ事

右條疵之科人大勢疵て犯疵れ節其内疵付疵れ者疵を重罪ニ致候

事本趣意企疵れ者ハ疵付疵不申疵れ共其次疵の科ニ申付疵れ事但

疵疵を得疵れ者若死ニ至疵れハ同行之内人疵を殺候疵郎不留之律ニ依疵て鞭十五

76 一喧嘩疵ニ疵て双方疵底疵有無疵之事

定疵れ事尤跡疵より手を下し理直疵き方ハ二等を減疵可申事

三六 疵疵療治之事

77 一疵疵を蒙疵り疵れ者日切疵を立打擲疵れものより療治疵を致さしむハ

内疵ても疵平愈疵致疵れ断差出疵れ浚餘疵病疵ニ疵て死疵れハ疵只打

擲疵之罪疵可加事

78 一指一本を折以已上疵之底日限之内療治疵ニ而平愈疵致疵れハ疵罪

二等朱可減日限朱満朱る日迄平愈無疵之者ハ右之本律疵を以相

用疵れ事尤婦人破産并病氣平愈疵ニ疵ても痼疾等疵ニ至疵れハ

罪減申間敷事

79 一手足其外之物疵ニ疵て輕疵き打疵底ハ廿日限疵り金創火毒ハ三十日

限疵切手足疵を打骨痛疵婦人之墮胎ハ五十日限

三七

勢を以人を縛り打擲致しむ者

80

一 争論ニ依て人を縛り打擲致し或ハ於私家人を押籠め等

致し者鞭九若疵疵重ク内損吐血已上ニ至ルハ平人打擲

より二等を加ヘ可申事尤自分手朱抹を下不申右差図致し者
の本罪ニ可致事差図を受手を下しし者一等を減可申事
〔四ウ〕

三八

下人主人を打擲致しむ者

81

一 下人として主人を打擲致し者獄門死ニ至ルハ鋸引怪我

ニテ殺ルハ斬罪怪我ニテ疵付ルハ徒一年半鞭三十

82

一 主人下人を打擲致したしむ者輕き疵ハ御沙汰ニ不及事打

リ已上之疵疵人打擲より四等を減可申事死ニ至ルハ

ハ鞭十八怪我而ニテ殺ルハニ不及御沙汰事

三九

妻妾夫を打擲致しむ者

83

一 妻夫を打擲致しものハ鞭十五打傷已上之疵疵ハ平人より三

等を加ヘ可申事目を潰已上ハ斬罪死ニ至ルハ磔

84

一 若妻ハ夫并妻を打擲致し者ハ又一等を加ヘ可申事ニ至ル

ハ磔尤加るものは朱抹加テ死ニ入ル事

85

一 夫妻を打擲致しもの打痛傷已上ニあらされハ御沙汰ニ不及

事右已上ハ平人〔一五オ〕人の律ニ二等を減可申事死ニ至ルハ斬罪

妾を打擲致いたし打疵折傷已上ニ至ルハ又二等を減可申事

死ニ至ルハ鞭三十妻之妾を打擲致しハハ夫之妻を打擲

86

致致と同様之事怪我ニテ殺ル者其証據於分明ハ不及沙

〔朱抹〕法事御

一妻之妾を打擲致し得ハ

四〇

兄弟之打擲

87

一 弟并妹として兄姉を打擲致し者鞭廿七疵付ハハ鞭三十

打傷ハ徒一年〔朱〕半刃傷ニ及手足を折一目を潰已上ハ斬

罪死ニ至ルハ獄門伯叔父姑を打擲致者同様之事怪

我ニテ殺殺或ハ疵付しもの本罪傷之罪ニ二等を減可申事

尤贖〔一五ハ〕之難相成事

88

一 兄姉の身として弟妹を打擲而て殺伯叔父姑之甥姪を打擲

ニテ殺而ハ鞭三十〔朱〕怪我ニテ殺し証據分明ニ於て御

沙汰〔一五ハ〕不及事

料

89

一子孫として祖父父母を打擲致ゆ者并妻として舅姑を打擲致ゆ者獄門死ニ至ルハハ鋸引怪我ニテ殺スヘハ斬罪

入墨

鞭三

〔二六才〕

資

90

一祖父父母子孫を打擲て殺ゆ者鞭十五繼母ハ一等を加ヘ可申事但子孫祖父母罵リ或ハ打ゆニより依之打擲致死ニ至ルハ御沙汰ニ及不申怪我ニテ殺スモ同様之事

四一

一師匠を打擲致ゆ者平人ニ二等を加ヘ可申事殺ゆ者ハ磔

四二

一祖父父母人の為に打擲せられ其子孫救ゆ為め返打ゆ者

輕き疵ハ御沙汰ニ不^以及打傷日^以上ニ至リルハ平人打擲より三等を減可申事死ニ至ルハ^以定法之通可^以為^以下手人

四三

一盜致ゆ者入墨之上盜取ゆ高ニ應輕重罪科可行事

盜賊

竊盜

之

定

一四〇

※

一十	文以下	鞭三	〔二六才〕
一十	文以上	同六	
一十	文以上	同九	
一十	文以上	同十二	
一十	文以上	同十五	
一十	文以上	同十八	
一十	文以上	同廿一	
一十	文以上	同廿四	
一十	文以上	同廿七	
一十	文以上	同三十	
一十	文以上	徒半年同三十	
一十	文以上	徒一年同三十	
一十	文以上	徒一年半同三十	
一十	文以上	斬	
一十	文以上	斬	

〔但徒之者ハ死罪一等を許ゆ事〕

〔二六才〕

右錢高を以罪之輕重を定む義盜取之品幾人よても分らて〔朱〕四

〔抹消〕別前

も分高之高ニ抱〔拘〕盜取ゆ本高を以一人毎ニ罪を加へゆ

事尤徒之從者ものハ一等を減可申事但一時に數家ニ於て盜

取ゆ邸其内只一家の財多き高を以罪を定ゆ事米穀ハ時之

直段を以錢に直し品物直打致せ錢ニ差積可申事

①忍者一盜ニ入ゆもの財物を取不申ゆハ鞭三入墨ハ許之人之土

藏を破り或ハ盜ニ入ゆ次第ニ寄リ大盜ニ紛無之ゆハハ

財物ニ不抱拘入墨鞭三十

94

※95

一入墨之義腕へ廻し幅三分程入墨可致尤初度ハ大腕へ彫リ右ノ

二度目ハ左へ彫三度ニ及ゆハ不寄多少斬罪

〔欄外書入〕

御刑法帳之表盜

貨百三十貫文以

上死刑之科目ニ

得共盜取ゆ節

之金價高下に寄

〔朱〕四

リ金高同様に

も死活ニ相掛不

拘様ニ付古来よ

り御定被置ゆ俵

子金給渡之割

を以金老兩八拾

目米一俵拾五文

〔朱〕四

目之積ニて以來

右百三拾貫文ニ相

當りゆ様被仰付

〔一八一三〕

文化十癸

〔朱〕四

酉年十一月廿六日

〔欄外朱書〕

無宿者鞭十八より以

上之刑相犯ゆ者並右

以下ニ而も盜二度ニ及ゆ者其外輕罪

ニ而も扱三度ニ及ゆ者乞食手下江

仰付、事

〔一八一四〕

文化十一戊十一月

〔戊〕

御城中へ入盜致候者

〔一七〇〕

以下頭書ニスベシ

未年四月表坊主棟

一四一

林斎律 方嘉林隱「居之浚病屈ニ而御城へ紛入ルニ付死罪一等御許シ」
免徒刑ニ被仰付レ例
〔朱抹〕①二等を許シ

四五

自分預リ之物を私曲致ス者

97 一御預ケ物を致私曲盜取ル者首従差別無之盜取ル錢高を以罪を定ル事 尤幾人而分ル而も分前均
以一人毎ニ罪を加ル事

以 以下

入墨 鞭九

一ニメ五百文

同十二

一五メ文

同十五

一七メ文

同十八

一十メ文

同廿一

一十二メ五百文

同廿四

〔二七ウ〕

一十五メ文

同廿七

一十七メ五百文

同三十

一二十メ文

徒半年鞭三十

四六

御藏之財物を盜取ル者

98 一御藏之財物を盜取ル者并御藏廻之者共御藏之財物を私曲致ス者
事尤幾人而分ル而も分前均
以一人毎ニ罪加ヘル事 尤一人毎ニ罪加ヘル事

定

入墨 鞭六

〔一八オ〕

一二十五メ文

徒一年鞭三十

一三十メ文

徒一年半鞭三十

一四十メ文

死罪の代り徒二年 鞭三十

一五メ文

同九

一五メ文

同十二

一十メ文

同十五

一二十メ文

同十八

一二十五メ文

同廿一

一三十メ文

同廿四

- 四七 強盜
- 一 追剥強盜之者既ニ行ひ^得ハハ財物を取不申共一年半鞭三十既に財物取^をハハ同類不殘^得
- 一 盜ニ忍入^朱ハ者其家之人^ニ手向^ニいたし或は^疵付^得ハハ強盜之^之御仕置たるへき事但同類之者助力不致者ハ竊盜を以沙汰可致事
- 一 若竊盜既ニ財物を捨逃去^レハ其家人追懸^朱因^而て手向致^レハ者^朱不用此^而「律科人^手向致^レハ律を以刑を加へ^レハ事
- 一 三五^文五^以メ^上 同廿七
- 一 四^文十^以メ^上 同三十
- 一 四^文五^以メ^上 徒半年鞭三十
- 一 五^文十^以メ^上 徒一年鞭三十
- 一 五^文五^以メ^上 徒一年半鞭三十
- 一 八^文十^以メ^上 斬
- 但御藏廻^分之者私曲致^レハハ死罪之代り徒二年鞭三十

- 四九 「行間書入」火附
- 一〇六 ※一盜^之の為火^者を付^レハハ火刑但燃立不申^得ハハ斬罪但火^者を可付旨—張札投文致^レハ者徒二年鞭三十
- 一〇七 ※「欄外書入」
「火札之刑書加」
「二八〇四」
之義文化元年
子ノ六月御用所
御演説を以書加^之
- 一〇八 一馬^者を盜賣買致^レハハもの斬罪
- 一〇九 馬盜
- 一一〇 盜杣
- 一〇二 一白晝人之物を奪取^者ハハもの鞭三十若取^之ハ品之高多く^之ハハ竊盜之罪ニ二等を^レ可加事從^之者ハ一等を可減事
- 一〇三 「朱抹」
一又難船等之郎便に乘乱妨^致いたし^者ハハもの同様之事
〔一九九〕
- 一〇四 一喧嘩等^致いたし因て財物を奪取^者ハハ是^又同様之事
- 一〇五 一巾着切之類搶奪ニハ無之^者ハハ竊盜之律を以刑を加へ^レハ事

109 一 盜和取致_レル者和取之多少を以御藏之財物盜取_レル律を以刑を可加事」尤入墨は許し_レ事

を可加事」尤入墨は許し_レ事

110 一 山師共過木伐取_レル者伐出之過木不殘取上_レ伐出之多少を以罪を加へ_レル事前條同様之事

罪を加へ_レル事前條同様之事

111 一 御留山ニ_テ柴薪木等盜取_レル者過料一貫文尤伐出高多_レル鄭ハ錢」ニ差積一倍之過料可申付事御留山ニ_テ無之共御停止木伐取_レル者同」様之事

御留山ニ_テ柴薪木等盜取_レル者過料一貫文尤伐出高多_レル鄭ハ錢」ニ差積一倍之過料可申付事御留山ニ_テ無之共御停止木伐取_レル者同」様之事

112 一 山中伐荒有之科人不相知_レ郎ハ伐荒多少を以山下村過料可申付事」但檜一本代小杉百本杉雜木一本代小杉五十本

山中伐荒有之科人不相知_レ郎ハ伐荒多少を以山下村過料可申付事」但檜一本代小杉百本杉雜木一本代小杉五十本

114 一 伏荒之場所へ植付不相成所ハ手寄空山見立植付_レ様尤植付多時ハ」三ヶ年五ヶ年之内_{右ハ}巳ノ年濟

伏荒之場所へ植付不相成所ハ手寄空山見立植付_レ様尤植付多時ハ」三ヶ年五ヶ年之内_{右ハ}巳ノ年濟

113 一 無極印之材木賣買致_レル者取上_レ之盜物を乍存賣買致_レル律を以刑を加_レル事

無極印之材木賣買致_レル者取上_レ之盜物を乍存賣買致_レル律を以刑を加_レル事

五二 流失流木盜揚_レル者

115 一 出水之鄭流失流木取揚_レル_者の見分之上五ヶ一山師より相

渡可申事若隱」置_レル而被_レ召出_レ郎隱木多少を以過料為差出_レル事」

定

一十本_{以下}

一十本_{以上}

二十本_{以上}

三十本_{以上}

四十本_{以上}

五十本_{以上}

六十本_{以上}

七十本_{以上}

八十本_{以上}

九十本_{以上}

一百本_{以上}

五三 田野之穀物盜取_レル者

116 一 田野之穀物盜取_レル者竊盜ニ準し多少を以罪を定_レル事但入墨同様之事」

117 一 柴草木石之類人切_功を以伐取積置_レを擅_レ取_レル_者是又同様

〔一〇オ〕

之事」但入墨免之

五四

夜中無故人入る者

〔二〇ウ〕

五三

一夜中無故人の家へ入る者ハ鞭三若其家人即時に殺し

①者 郎ハ御搦無之」若又既ニ捕置擅ニ打擲いたし疵付ルハ、

平人打擲より二等を減罪行ひ」ル事死ニ至ルヘハ鞭三十

五二

盜之宿いたし者

五一

一強盜之宿いたし者其身不行共財物分取ルヘハ磔財物取

不申ルヘハ徒」一年半鞭三十

一四〇

一竊盜之宿いたし財物分取ルヘハ其身不行共竊盜之首と可

為同罪事」財物を取不申ルヘハ一等を減可申事入墨同様

之事」

一三九

一強盜竊盜の盜物乍存買ルもの品物錢ニ差積リ竊盜之律二

等を減罪」に行ひル事乍存預置ル者又一等を減ル事但品

物高多ルとも鞭十五にて」許可申事若又不存ルヘハ御搦

無之品物ハ本人ヘ返可申事」

五六

〔行間書入〕「勾引」

一手段を設け人を勾引ル者鞭三十因て人を抵付ルもの斯

五七

入墨を抜取ル者

一四三

一盜致し入墨を被行ル者其後竊ニ拔ルもの鞭入墨仕直し可

申事」

五八

謀書謀判致ル者

一四二

一御印并奉行諸役人の判を似せ造り諸渡物等盜取ルもの獄

門未財物を不取」ものハ死罪一等を減可申事

一四一

一似せ印形似せ手紙或ハ古手形を取披公私之ものを取ルもの

ハ竊盜ニ準し」錢之高を以罪科之輕重を可行事但入墨

竊盜同様之事」

一四〇

一語らひ手段ニ而取ルものは又竊盜同様之事但入墨免之

等を減可申事」入墨免之

一三九

役人を似せル者

一三八

一在ミ通り役人を似せ往來之人馬賄等差出させルものハ鞭

三十

〔二ウ〕

六〇

似せ金銀を造らもの〔朱〕者

129

一似せ金造らもの并私錢を鑄らもの者磔細工人同罪其餘加

談のもの者死罪一等を減可申事但似せ金を乍存通用致は者同様之事是又

賄賂

六一

枉法賄賂之事

〔朱〕賊〔朱〕枉法之賊といふは金銀貨財を取て其罪を見のかしてや

〔朱〕賊〔朱〕るを枉法之賊といふ

130

一賄賂を枉たる事をいたしはもの錢之高を以輕重之罪科可

〔朱〕の〔朱〕行事尤何人よ〔朱〕り受はても物錢押合其高を以て罪を相定

い事若犯は事重くは、人〔朱〕之罪を輕重致は律を以刑を

定

一五文以下

一五文以上

〔朱〕鞭〔朱〕三〔朱〕六

同九

一四六

〔二オ〕

一十文以上

同十二

一十五文以上

同十五

二十文以上

同十八

二十五文以上

同廿一

三十文以上

同廿四

三十五文以上

同廿七

四十文以上

同三十

四十五文以上

徒半年鞭三十

五十文以上

徒一年同三十

五十五文以上

徒一年半同三十

百廿文以上

死罪代徒二年鞭三十

六二

不枉法賄賂之事

〔朱〕不〔朱〕法ハ枉ね共賄賂を受るを云凡不義の財を賊といふ

131

一頼を受錢を取らへ〔朱〕枉たるに無之ものは物錢之高押合半

分ニして罪を定〔朱〕い事但一人より受らハ半分ニ不致事

132

六三

坐賊之事

一 差而頼合レ事も無之通例只財を受レ分ハ坐賊之罪ニ可行

慈郎切音賊夫受財也凡非理所得賄賂皆曰賊
〔朱抹〕類
〔賊〕

一十文以上	鞭三
一十文以上	同六
二十文以上	同九
三十文以上	同十二
四十文以上	同十五
五十文以上	同十八
六十文以上	同廿一
七十文以上	同廿四
八十文以上	同廿七
九十文以上	同卅
一百文以上	徒半年鞭三十
一百十文以上	徒一年鞭三十
一百二十文以上	徒一年半鞭三十

定

〔三三オ〕

133

六四

賄賂之約諾致ル者

一 賄賂之約諾致未財物手ニ入不申共事任ル者ノ枉法

一十文以下	戸ノ廿日
一十文以上	同三十日
一廿文以上	鞭三
一三十文以上	同六
一四十文以上	同九
一五十文以上	同十二
一六十文以上	同十五
一七十文以上	同十八
一八十文以上	同廿一
一九十文以上	同廿四
一百文以上	同廿七
一百廿文以上	同三十

事尤惣錢半分ニ致ル而罪を定ル事前條同様之事尤與之
〔朱抹〕
ル者三等を相減ル事

〔三三ウ〕

「二四オ」朱抹①に付ひ
ニ準し一等を減し罪を加へ可申事約諾のみニ而未事を
得
枉不申ゆへハ不枉法ニ準し一等」を減罪を可加事
①可申事

六五

賄賂を行ひ者之事

一三四

一下之者願事有之賄賂を行ひて法を犯し事を得ゆへハ差出
得
「朱」而
ゆ錢高を以」坐賊の事ニ當刑を可加事尤犯し事重ゆハ
重き方ニ而沙汰可致事若」上強て無據差出ゆへ御咎無之
事」
たる者強ゆ而

六六

茂合取立私曲致ゆ者

一三五

一茂合錢為差出私用ニ致ゆもの犯法を以罪ニ行し事音信ニ
者枉
相用へ自分」使不申共同様之事

田宅

六七

隠田畑

一三六

一隠田畑致ゆもの一反歩る五反歩迄ハ鞭六五反歩毎ニ一等
者
を加へ可申事」

但隠田畑御取上隠ゆ反畝一年之年貢可差出事
令

「二四ウ」

一三七

一御檢見之郎惡地抔を振替見せゆもの右之格_者にて一等を減
而
可申事尤」反畝多共鞭十五ニ而許可申事村役之_者もの乍
存見逃いたし置ゆハ」本人同罪之事若不存ゆへハ五反
以
步_{に致}曰下ハ許之五反歩曰上ハ右之格_而にて」三等を減可申尤
反畝多共鞭九ニ而許可申事」

六八

田畑質入

一三八

一年季を以質入致ゆ田畑年季相濟本人より元利返済受戻し
得共
を求」ゆへハ外事ニ托し不相返年來押領いたし者鞭三
年來之小作米可」令返事

六九

田畑之押領之事

一三九

一他人之田畑を事_朱ニ寄せ押領致ゆ者屋敷ハ一軒田畑ハ志反
步より五反」步迄鞭三五反歩毎ニ一等を加へ可申事尤反
而_{二五オ}
畝多とも鞭十八にて」用捨可致事但年來之小作米令返事
前條同様之事」

七〇

「朱」倉庫_之
御取納遲滞

140 一 御收納ハ年々十一月三十日迄皆済可致事若翌正月まで無故して皆「濟無之者御收納高十分ニ割一分滞^得ハハ戸メ廿日一分毎に一等を加」へ可申事村役同様の事尤鞭九疋^得ニテ許可申事」

七二 内借 一 御藏廻^者の御藏の米錢内借致^者米錢之高を以竊盜ニ準し罪」ニ行可申事若懸之者^非にあらされハ一等を減可申事但入墨ハ許^免之」

七二 一 訴状を差出^ル者其向^ク支配頭^ニ差出可申事手越ニ致し奉行御役^人ハ差出^ル而も取上申間敷事若願難相成^義を強^テ手越^ニ致^ル者^戸メ三十日但可相立筋を支配頭ニ而取押置或ハ支配頭之非道取扱有^之」を訴^ル類ハ可為格別事

七二 「朱」江 一 訴状を差出^ル者其向^ク支配頭^ニ差出可申事手越ニ致し奉行御役^人ハ差出^ル而も取上申間敷事若願難相成^義を強^テ手越^ニ致^ル者^戸メ三十日但可相立筋を支配頭ニ而取押置或ハ支配頭之非道取扱有^之」を訴^ル類ハ可為格別事

七二 「朱」江 一 訴状を差出^ル者其向^ク支配頭^ニ差出可申事手越ニ致し奉行御役^人ハ差出^ル而も取上申間敷事若願難相成^義を強^テ手越^ニ致^ル者^戸メ三十日但可相立筋を支配頭ニ而取押置或ハ支配頭之非道取扱有^之」を訴^ル類ハ可為格別事

七三 無名之訴状

144 一 無名之訴状投文致^ル者鞭三^{〔朱〕意}訴状之趣取上沙汰致間敷事

七四 不實事を訴状致^ル者 一 不實の事を申出人を罪に落さんとする者鞭刑追放ニ可被^得行事を訴^ルハハ可為追放事若死罪ニ可相成^義を訴^ルハハ^{〔朱〕二}鞭三十^{〔朱〕一}徒一年半^{〔朱〕二}鞭三十^{〔朱〕一}徒一年半

146 一 若被訴^ル者御沙汰ニ極^テ其罪被行^ル後不實之事頭^ハハ^{〔朱〕ハ}罪ニ被行^ル者^{〔朱〕ハ}之刑ニ一等を可加事死罪ニ被行^ルハ^{〔朱〕ハ}可^{〔朱〕ハ}為解死事^人

147 一 若ニテ條訴^ル郎輕き事ハ實^ニ重^キ事ハ偽^リ或ハ一事ニ^而而も輕^キ事重^キ事^{〔朱〕可}申^ルを以刑^ニ行^ル事

七五 親族訴^ル者

148 一 子孫として祖父母争母^ノ之^事を訴妻として夫并舅姑之事を訴^ル者^{〔朱〕六}虚^ノ鞭三十^{〔朱〕六}空説を搦^テ裁許を願^ル者ハ斬罪

149 一 伯叔父姑兄姉之事を訴^ル者鞭十五^{〔朱〕六}訴^ル事偽^ニハ^{〔朱〕六}平人

より罪三等を加「へ可申事但被訴^ハ者科人自身申出^ハ律
と同様之事若伯叔父兄姉非^ハ道之事有^レ之不得止事申出^ハ分
ハ可為沙汰事^{〔朱〕格別一}

七六 子孫父母之教ニ背^ル者
親族訴^ル者

150 一子孫として父母之教ニ違^ヒ或ハ養育欠^ル義有^ル之ものは鞭
十五但父母の^之申出ニ寄刑を加へ^ル事

七七 〔朱抹〕^①推
訴訟之腰押致^ル者

151 一訴訟之腰押致^ル者或ハ人之為ニ訴状を造り人を罪に落さ
んと致^ル者本人と同罪之事

七八 強訴

152 一願難相立義を大勢徒黨^ニいたし支配頭之差凶を不相用於強
訴^ハ其^{〔二六ウ〕}棟梁致^ル者鞭廿四加談致^ル者一等を可減事其餘
一通り之餘黨ハ吟^{〔朱〕看之}味之上用捨^可有事

〔朱〕運^一
關上

七九 隠津出^①之事
〔朱抹〕

193※ 一隠津出致^ル者品物取押鞭十五相對^ニ賦^ルもの過料一
メ二百文^以但二百俵^{以上}之隠津出^ハ家財家屋敷欠^ル所所拂
可致事^{〔欄外書入〕}

〔隠津出致^ル者御片付之儀御定通鞭
十五ニ被行其所へ差置^ル而ハ又々隠津
出手段取巧^ル御沙

汰ニ而所拂之上外
濱ハ四ヶ組住居御
搦被仰付^ル様申上

罷在^ル得共左^レ而

〔朱〕而^一
ハ浦浦へ住居勝手次第之様心得^ルハ却て差障ニ相成^ルニ
付湊濱村組前田村市五郎御片付之筋鞭十五被行所拂之上
外濱浦浦並四組住居御搦^{〔八〇一〕}

被仰付^ル様申上相済以來右之通相認可申事尚又西濱も右
之心得^ルニ而取扱^可有事 寛政十三酉年二月

194※ 一米留^有之節無手形米隠出^ルもの鞭六駄賃付過料一メ二百

文

※〔付紙〕

「米留所忍通馬取押ニ相成御食議之節自分持馬ニこれなくとか持馬ニ有之由而も他人之馬借由而取押ニ相成由旨」申出由節尚又食議之上馬貸由旨申出有之時ハ人別帳並馬帳食議之上分明ニ由得ハ本人江相返可申事

尤勝本村米留所ニ而馬並米取押之節外人より

借由馬ニ正有之本人へ相返由之義同相濟

寛政十三年酉年二月

米留所忍通由者荷物並馬共御取上之答

〔朱〕巳ノ〔朱抹〕七月二十一日被仰付由事

八〇

隱荷物

一 旅船荷上致しもの品物取押相對し問屋鞭六家業取放由事

隱揚者

八一

隱商賣者

一 隱商賣いたし由もの品物の取押過料可差出せ事但過料之定別「帳戸数方ニ條例有之

〔二七オ〕

雜犯

八二

博突

一 博突致しもの鞭三其場之金錢没取可致事但宿致し者可為同罪」事尤其場ニ居合由者之外同類有之共ニ詮議ニ不致事但輕きハ實引よみかるた等

八三

御用事を頼合致し者

一 御用事を曲けて頼合いたし由者戸メ三十日頼由者並頼を受由もの同罪之事若既ニ施行由ハ頼を受由ものハ頼

六頼由ものハ其事」親戚朋友之為ニ由ハ本罪二等を減

自身之為ニ由ハ本罪之上ニ一等を加へ由事尤由由事

重由ハ人之罪を輕重致し律を以刑を加へ由事為是賄

略を取由ハ犯罪之律を以刑を加由事

八四

人之罪を輕重致し者

一 依怙畏負を以人之罪を輕重いたし由もの其増減致し由所を

以其分之罪」を加へ由事若或ハ全く隱或ハ全く偽由ハ其

本罪を以刑を加へ由事

〔二七ウ〕

失火

160 一失火致ゆ者戸メ廿日類焼有之ゆヘハ三十日因て人を焼死

得 但〔朱〕而致〔朱〕江 加へル事若御宗廟并御城ホへ類焼ニ〔等〕及ゆヘハ徒一年半

資

161

〔行問書入〕 諸役所並御藏内ニ於て失火致ゆ者鞭二十四

八七

御觸ニ背ゆもの者

163

一御觸ニ背ゆものハ事之輕きハ戻メ十五日重きハ戸メ三十日

日

八八

不可為義をいたしゆ者

164

一不可為義を致ゆもの事之輕きは戸メ廿日重きハ鞭三

ノ項別項トシ前ト對等ニカクベシ此ケ條之義元來重キ科ハ律ニ正敷ケ條有之ゆヘ共輕き事ニ至リ事變萬端ケ條之難述右様之儀延ゆ間有様之義二等ニ分比ケ條を以沙汰可致事〔二八オ〕

八九

科人手向致ゆもの者

165

一科人逃去捕手之者ヘ手向致ゆもの本罪之上ニ二等を可加

事尤人ニ抵〔朱〕而付打傷ニ至ゆヘハ斬罪

九〇

科人出奔

166

一牢破并預之内繩解き出奔致いたしゆ者本罪ニ二等を可加事

167

一預之者不覺〔朱〕而取逃ゆ者預人并番人三十日内ニ取ゆ様申付若捕兼ゆ科郎ハ罪人之科ニ三等を減態逃ゆヘハ科人同

様罪〔朱〕可と〔朱〕書

九一

科人を隠ゆもの者

168

一科人御僉議之ものを乍存隠置或ハ其事を告知らせ逃ゆ〔朱〕可郎ハ科人之罪ニ一等をや減事

九二

私ニ升秤を造る者

169

一私ニ升秤を造通用升を増減〔朱〕而いたし奸曲致ゆもの鞭六〔二八ウ〕

九三

御関所忍通ゆ者

170 一 御関所忍通者ひもの鞭九山越致者ひもの鞭十二

九四 一 科有御沙汰之上追放被仰付者ひもの御搦之地立歸江へハ鞭
立歸婦之者もの

171 一 科有御沙汰之上追放被仰付者ひもの御搦之地立歸江へハ鞭
三本のことく追放可致事

172 一 惡事有之他國出奔朱江致者其後立歸リ忍居者ひもの本罪より
一等を可加事但本罪輕くハ御関所忍通罪ニ一等

173 一 惡事無之出奔之後立歸江者御関所外出不申得へハ過代夫
役廿日

九五 一 馬札紛失致馬札紛失
一 馬札紛失致ひ者過料一貫文

174 一 無札之馬賣買致者ひ者鞭三
行間書入

九六 一 妾淫者犯妾姦淫
一 妾淫者ハ徒一年升鞭三十未成者ハ鞭三十

176 一 妾淫者ハ徒一年升鞭三十未成者ハ鞭三十

177 一 強姦者ハ徒一年升鞭三十未成者ハ鞭三十

178 一 幼女十二歳以下を女を強姦同様之事

179 一 妻女を許て姦を為致者本夫妾婦何れも同罪之事
右何れも姦所ニ於て見届慥成證據有之夫或ハ親類より申
出ニ寄御沙汰可致事外方訴上類ハ御取無之

九七 一 僧尼之犯姦朱江犯姦
一 僧尼之犯姦朱江者ハ平人姦淫之罪ニ一等を加へ還俗可致事

180 一 僧尼之犯姦朱江者ハ平人姦淫之罪ニ一等を加へ還俗可致事
犯姦者ハ平人姦淫之罪ニ行事

九八 一 下人家長之妻女を姦者ハ一等を減可申
下人主人之妻女を姦者ハ一等を減可申

181 一 下人家長之妻女を姦者ハ一等を減可申
下人主人之妻女を姦者ハ一等を減可申

九九 一 男女申合相果者ハ子細無之朱江ハ死體取捨若女を先ニ
殺シ男存命ニハ下死人男相果女存命ニハ下死
殺シ男存命ニハ下死人男相果女存命ニハ下死

182 一 男女申合相果者ハ子細無之朱江ハ死體取捨若女を先ニ
殺シ男存命ニハ下死人男相果女存命ニハ下死

183 一 男女とも底計共存命ニハハ是又三日肆シ乞食手へ相
渡可申事

183 一 男女とも底計共存命ニハハ是又三日肆シ乞食手へ相
渡可申事

料 資

184 一主人下人と申合相果^者の^下人相果主人存命ニ^得ハ^解死^朱手人ニ不及^得乞^得食手へ相渡主人相果^下人存命^得へハ獄門

100 隠遊女

185 一御免場所之外隠遊女抱置渡世致し^者ハ鞭三

八六 野火

162 一山師江野火付^者者鞭三若本人相知不申^得ハ其領分之村

所過料」為差出^事

但過料之定郡方別帳條例有之

〔化〕〔八〇三〕
〔三〇オ〕

文政三丙寅年十一月御沙汰直

山野江野火附^者者住居之所在引廻之上鞭十五若本人相
知不申^得」ハ其領分之村所過料為差出^事

但過料之定郡方別帳條例ニ有之

〔朱〕〔三〕
當時ニ奉行吟味ニ被仰付^者ニ付過料定別帳之義ハ

御刑法方ニ有之

〔七行空白〕

〔三〇ウ〕

點羽

〔七九六〕
一寛政八年辰十一月十七日土手町三國屋與兵衛^者出火ニ而
同人家部御印札焼失ニ付代」リ御印札願申出^者節御定通

リ過料銀壹枚上納之上御印札渡方可被仰付^者儀人」別調役

附紙ニ而申上^者處常体ニ而紛失之分ハ過料上納可為致管

如此果急之」事ニ而焼失之分ハ格別之事故過料ニ不及旨

伴才助申事ニ付附紙認直差出相濟」

點羽

一御印紙紛失為過料銀壹枚上納之上日數五日戸メ墨付^者而
も右同様」

御切手紙紛失為過料銀一枚上納之上墨付^者而も同様

右ハ吉澤庄太夫御用番之節同被仰付^者間以來右之心得

ニ而取扱可申事」

卯四月

一勘定奉行裏印手形紛失之者為過料銀五兩上納被仰付^者惣
觸有之^事」

〔八〇九〕

文化六己巳年十二月

覺

〔三二オ〕

科人片付之儀區々之沙汰被仰付^者之申出之趣被遊御聽届又以
御自筆被」仰出^者間致勘辨批判遂穿鑿勸善懲惡ニ相成^者儀

沙汰可有之旨四奉行^江能」々可被申含^者以上

三月

御用人中

御家老

御自筆之写

刑法帳沙汰之通申付ハ一体刑法之儀兼而一定之上ニシテ得

共ニ猶其時宜ニ寄輕重之沙汰も可有之事ニシテ且ク條ニ

適當之罪人有之ハ共何れ君臣之義ニ立父子之親ニ本付

總而人倫之義を論し其時々沙汰致ハ様依而必しも其「箇

條ニ不可泥事ニシテ

巳三月〔寛政九丁巳年三月右被仰付之〕

〔三二ウ〕

於堀五郎左衛門宅申渡之覺

寺社奉行

郡奉行

町奉行

勘定奉行

太田養益一体并其外共御片付之儀各沙汰被仰付ハ処沙汰及

遅々ハ上百澤「寺用達太田藤藏落口之筋有之ハ処一篇之衆

義ニ而強而御片付之儀沙汰申」出ハニ付右之段御不審ニ寄

再藤藏僉議之処何れも及白状依而各より無調法」之段御奉

公遠慮伺被申出ハ処被仰出ハ一体口聞之儀ハ罪科之深淺

輕重相」分ハ儀有之ハハ明白ニ尋問其上時宜相當之沙汰

可致義ニハ尤品ニ寄白状為」致却而大事ニ及ハ様成事ハ用

捨心得茂可有之儀ニハ処前條之一件無故忽」諸之沙汰ニ被

思召ハ浚来急度相心得沙汰申出ハ様ニ此度之儀ハ御用捨

を」以遠慮ニ不及旨被仰付之

三月六日

出座 大目付

〔九行空白〕

〔右ハ安永九庚子年〕

〔三二ウ〕

弘律

追加

一役筋取押品御片付之義盜和木并無極印木品御停止未取押

之分共是适」入札拂被仰付ハ様沙汰申上罷有ハ然処少分

之木品等ハ取押之役筋ハ被下」置ハ様沙汰仕申上ハ様御

演説を以被仰付ハ然ハ御制禁物取押之御片」付之儀御

刑法之表左ニ

惣而禁を犯ハ物を取押ハ儀其懸合役筋之者ニ無之ハ

ハ其品物取押ハ」者ハ被下置ハ事其役筋ニ而取押ハ

ハ押物多少ニ寄御賞被下其品ハ没収」可致事

右之通ニ御座、尤役筋取押之分是迄ハ押物高之内三ヶ一高を以御賞」ヒ下置ハ様沙汰申上罷有ハ処去々夏役筋押米入札拂之高不殘御」賞ニ申上ハ様被仰付、其後右之通申上罷有ハ処去年正月奥内村米留對馬」^{〔三三才〕}林藏米一俵取押之節入札拂申上ハ處右体押米之儀已來其品ニ而當」人江被下置ハ様沙汰直之上申上ハ様演説を以被仰付其後隱津出押米并」米留所前忍通ハ節押米之分其取押之役筋へ被下置ハ必竟一兩年以前」隱津出御締相緩ミハニ付役筋為勵合右之通被仰付ハ儀と奉存ハ乍去」格別心を用遠万迄相廻リ取押ハ分モ番所前押米同様之御片付ニ而ハ厚」薄之詮も無御座ハ尚又押木柄之類少分ニハとて被下置ハ儀ニ而ハ一体御片」付物之例ニ引合不申様ニ奉存ハ依之以來凡而押物仕分左之通可被仰付哉」

一 米留番所前ニ於て取押ハ分并湊方ニ而淵懸船相改隠積又ハ過積等有之」取押ハ分ハ其品入札拂之上代錢三ノ一積を以御賞被下置ハ様其外之抜來隱津」出取押ハ分ハ其不殘被下置ハ様

一 盜袖取押木並無極印木品御停止木凡而山役人手ニ而押ハ分是迄入」札拂被仰付其度ニ御賞被下置山奉行ニ而年中之處相束極月ニ至御賞」被下置ハ趣ニ御座ハ其譯ハ貳拾

年以來脇道番所之外番所引取被仰付」山役人弘前勤ニ相成ハニ付山元并在浦之差別なく見當リ次第取押ハ答」ニ而御極印打入方并惣而御用序往來ニ心ヲ付ハ儀不断之勤内ニ御座ハ殊ニ」前々より押米杯之例と違ハ申ハ間是迄之通被仰付ハ様尤諸目付並郡所支配之手ニ而押ハ分ハ極而當役之任内ト申ニも無御座ハ問押品入札」拂之上代錢三之一積を以御賞被下置ハ様」

一 隱商賣品並其外御制禁物之儀ハ其支配方懸リ之役人並諸目付見當」取押之分ハ入札拂之上代錢三ノ一積を以御賞被仰付ハ様」

一 惣而押物少分ニ而入札高三ヶ一之積を以御賞ヒ下置ハ高ニ不至分ハ其」品入札拂之上年中之所ニ而取束極月ニ至其勤功ニ寄御賞ニ被下置様」

一 惣而御制禁を犯シ御詮議被仰付罷越取押ハ分并其支配配頭より吟」味方申付ハ上之押物ハ是迄之通不被下置ハ様

一 役筋ニ無之取押物御片付之分ハ御刑法帳之通御片付被仰付ハ様」^{〔三四才〕}

右之通被仰付様尤前書ケ條を以沙汰難相成品之分ハ時宜御沙汰被」仰付ハ様此段申上ハ以上

△御添書内点羽之外四奉行沙汰之通

二

一 刑法ハ悪き者之懲之為仕ハ儀ニ御座ノ間其惡を懲ル程ノ罪を加ヘルテ可相成ハ家業田宅〔等〕不離ル様仕度儀然処御刑法御定是迄ハ輕キ罪ハ追放被仰付其上ハ鞭刑追放被仰付御定ニ御座ノ間戸メニ而御締難相成ハ郎ハ直ニ追放被仰付ノ間流浪之者多相成御國政之害ニ相成ハ筋も御座ノ依之以來其罪之次第ニ寄其所ニ難差置者ハ是」迄之追放被仰付一通リ懲ル而其所ニ置ル而も妨無之者ハ縦令鞭刑ニ行ル而も居村徘徊御免被仰付ノ様奉存ハ依之別紙鞭刑ニ行ル者居村徘徊御免之儀沙汰仕此段申上ノ以上」

〔一七九四〕
寛政六甲寅年閏十一月七日 四奉行

右沙汰之通被仰付ノ

三

一 過料錢上納之儀以來日限御定被仰付ニ付沙汰可申上旨被仰付則左ニ申上ノ」
一 過料錢上納之儀以來錢高多少ニ不抱日數三十日之内ニ上

納仕ル様被仰付」ル様左ルハ、以來御沙汰ニ寄過料錢上納被仰付ノ郎日數三十日之内ニ急」度上納仕ノ様其度ノ御沙汰書ハ書加可申上ト奉存」

一 過料錢上納之日數御定被仰付ノ上ハ此末日限御定之外上納相滞ル分ハ御」刑法帳之通貧困ニ而上納難相成者ハ銅鉛山ヘ差遣一日六拾文之積を」以夫役被仰付ノ様尤錢高三貫文迄ハ上納相滞ル分ハ日數三十日夫役被」仰付ノ様右以上之錢高ハ一日六拾文之積を以夫役被仰付ノ様左ルハ」銅鉛山ヘ差遣夫役召仕方之儀山奉行ヘ被仰付ノ様ハ其度ノ沙汰」仕可申上ト奉存」

一 老幼癆病之類夫役ニも難相成者ハ是迄御刑法帳之通其身〔疾〕空舍」之上一年或ハ二年ノ御用捨被仰付ノ様尤老幼癆疾之類過料錢上」納相滞ル分空舍之上一年或ハ二年ニ而御容赦被仰付ノ様御刑法牒本文」之趣ハ老幼癆疾之者重罪科ニ相當ル而も鞭刑追放等ニ難被行故贖ニ」而過料錢上納被仰付右ノ上納難相成者ハ幸居之上苦ハ義理ニ御座ノ」共」元來老幼癆疾之者之儀ニ御座ノ間以來之義ハ錢高三貫文迄之過料」上納滞ル分ハ一日六拾文之積を以日數慎被仰付ノ様鞭刑十八鞭所拂之贖拾」ニメ文之上死罪之贖四拾式メ迄之過料上納相滞ル分ハ重罪贖ニ御座ノ」間

一日六拾文之積を以て日數宰舎之上御免被仰付、様尤前書之通御定^{〔三五ウ〕}被仰付、而も老幼癯疾之者ニ付日數慎被仰付日用續方難相成者トカ又者入、宰被仰付助命無覺束歎其外子細御座、分ハ時宜ニ應格別段御憐、怒之御沙汰被仰付様

一村方之者共其村預御山ニ盜伐有之徒者相知不申村中へ過料上納被仰付、類柴薪等伐取願之通被仰付伐取相改^{〔等〕}ぬ過木、右之村中へ過料上納被仰付、類以來村役引擔之上日數三十日之内急度上納様被仰付右、日限過料上納相滞^{〔三六ウ〕}分ハ錢高多少ニ寄村役戸ノ之上滞^{〔三六ウ〕}錢高一、日三、十文之積を以夫役人夫差出^{〔三六ウ〕}様被仰付、様尤右人夫方之義ハ其組中諸、普請入用入夫之代ニ相廻其分年中郡方諸普請入用御渡錢之内より、差引上納相立猶又右之趣御代官引擔嚴重ニ取扱^{〔三六ウ〕}様被仰付、様、左ハ、右取扱仕向之義ハ私共ニ而夫、可申付と奉存

一寛政十年過過料上納被仰付、者共之義同年五月非常之大赦被仰付、^{〔三六ウ〕}過料上納皆捨被仰付其後過料上納被仰付^{〔三六ウ〕}者共之内上納相滞^{〔三六ウ〕}者も、御座、ニ付數度論定仕^{〔三六ウ〕}得共于今相滞^{〔三六ウ〕}者も御座、問右之者共急度、御制道被仰付、様沙汰仕可申上奉存、共必竟是追日數御定無御座

△所々右体心得違之者も可有御座奉存、而是追相滞緩怠不屈之義、ハ格段之御沙汰を以御用捨被仰付、様尤右上納滞^{〔三六ウ〕}分ハ日數三十日之内、急度上納致^{〔三六ウ〕}様被仰付、様左ハ、町在上納遲滞之分ハ郡奉行町、奉行ニ而嚴重申付早速上納可為仕奉存、尤九浦之分ハ勘定奉行、可申通奉存、沙汰仕此段申上、已上

子 九月

四奉行

△沙汰之通

四

一是追御刑法ニ被行^{〔三六ウ〕}者之内重罪ニ而徒刑ニ被行^{〔三六ウ〕}者ニ而も年限之苦、使相済^{〔三六ウ〕}得者居村居町住居御免被仰付、処輕キ罪科ニ而所拂被仰付、者共御法會、有之節追御免願申出^{〔三六ウ〕}儀も難相成又者手筋、無御座永^{〔三六ウ〕}く、御免難相成者も可有之哉、ニ付以來之処沙汰仕可申上、旨御演説を以被仰付、付左ニ申上、

一御刑法ニ被行^{〔三六ウ〕}者鞭十八已上所拂猶又其所ニ難差置者ハ鞭數ニ不抱所、拂被仰付、然処重罪ニ而徒刑ニ被行^{〔三六ウ〕}者とも年限之苦役相済^{〔三六ウ〕}得者本、所居住御免被仰付、処輕罪科ニ而御追放被仰付、者共御法會之節御、免願申出^{〔三六ウ〕}

分ハ御沙汰ニ寄御免被仰付ハ得共遠所ニ罷在前罪を悔

本所ニ立歸度心懸ル者御法會ホ不存空ク年月を送ル者も可有御座ニ哉又「手筋無之流浪之身と成行ル者も可有之哉何れも御國民一体之儀ニ御座ニ」間惡事有之郎ハ懲而前非を改ム郎ハ御免被仰付ハ義其罪之次第ニ寄一「年二年又三年ニ而御免被仰付可然哉ニ奉存ル尤前書申上ニ通下より願不」申上ル而ハ難被為及御沙汰猶又右之趣御觸出被仰付ニテハ御差障之儀」も難計奉存ハ間彌右之通被仰付ニハ、私共ニ而取調年々十一月御沙汰之上」御免之儀可被仰付哉」

一是迄之通ニ而ハ甚不締ニ御座ニ間是迄御追放被仰付ノ者共御免無之内ハ人別牒申」出無御座ニ得共以來ハ御追放被仰付ルても御領内ニ住居之分ハ落着先寺社并町役村」役々其旨斷申出其段人別方江時々斷ル様尤其者幾度住居を改メル而も先々より」其方々申出ル様尚又年々八月人別御改之節御追放者居住之譯寺社并町在人別」牒之外別紙を以書出ル様被仰付ニ様左ルハ、前書御追放者向々人別帳へ申出ル義」九浦町奉行へ被仰付ル様寺社并町在之儀ハ私共ニ而夫々可申付と奉存ル沙汰仕此段」申上ル以上」

五

丑二月十二日

四奉行

沙汰之通

(三七ウ)

〔一八〇六〕
文化三寅年野火入御締合之儀ニ付御用所御沙汰書左之通」

一野火付ノ儀前々御制禁之処不得止事野火入御座ニ付安永九年御締合之義嚴重」被仰付其後も度々被仰付過料錢上納ル之儀ハ被仰付ニ得共今以所々野火入ルて此郎」專諸木仕立方も被仰付在ニ諸木仕立方段々御座ニ得共野火を恐れ空山へ諸木仕立」方存念之程仕立も出来兼ル旨相聞得ル間此度又々此上御締方も可有之哉之旨四奉」行へ沙汰申付ニ處別紙之通申出ニ付私共ニ而も沙汰仕申上ニ右野火之儀ハ必竟」野火停止建札文言ニハ嚴刑と有之ル得共御刑法帳ニハ山野へ野火仕ル者鞭三之刑」ニ而輕刑ニ被行ハ間下賤之者共一山へ野火入過分之諸木手取ル儀も有之ニ付右位之輕」刑ニ御座ニ間右之御刑法不恐野火之御制禁を相背ル者も有之旨相聞得申ル間御」刑法帳之儀右之通御定ニ御座ニ得共野火停止建札文言と御刑法帳

と組齎仕（三八才）ハ様奉存（三八才）ハ間以來之義ハ野火付（三八才）ハ者見當搦捕申出（三八才）ハ、其在町共其町（三八才）ニ引廻之上十五敲之刑ニ可被行ハ哉左ハ、自然と相止可申儀と奉存ハ右之外四奉」行沙汰之通可被仰付哉沙汰仕此段申上、以上

寅十月

御用人

申出之通

六

一是迄御目見以上并以下上御給支配人罪科有之旨被及御開番人付

之上頭方へ御詮議」被仰付（三八才）ハ而も及白状不申ハ私共

ニ而口開僉議方被仰付ハ右之内御目見以上之族」ハ常人

及白状不申内ハ揚屋入之上御僉議申上、先例無御座ハ然

処御目見以上之族」ニ而も私共ニ而口開僉議之上白状ニ

及ハ郎其罪ニ寄直ニ揚屋入不被仰付、而ハ出」奔之程難

計尚又宿元へ相返ハ而ハ如何様之取巧仕ハ哉難計族も可

有御座哉」ニ奉存ハ随而來御目見以上之族ニ而も罪科

有之私共ニ而口開僉議之節及」白状ハ分ハ其族ニ寄私共

ニ而直ニ揚屋入申付其旨御達申上、様被仰付ハ様」

一御目見以上之族罪科有之新屋敷御長屋へ押込番人付被申

付ハ分並當人及白」状揚屋入被仰付、分ハ大小取押置私

七

共ニ而詮議之節ハ途中駕籠ニ乗せ町同」心附添大小ハ涉紙包（三八才）ヲ致シ為持來ハ得共宿元ニ而番人付被仰付ハ族私共ニ而」僉議之節途中番人附添ハ迄ニ而僉議之節大小取押不申尚又口開僉議之」節両目付詰合無御座、随而來四奉行口開僉議御座、節両目付之内一人」詰合被仰付御僉議之族僉議之席へ相詰ハ節合之役筋ニ而大小取押僉議方」相濟歸宅之節大小相渡ハ様此段奉伺ハ以上

十二月廿八日

四奉行

伺之通

一取上村御仕置場磔獄門火罪有之節番人ハ取上村より差出し來ハ得共肆之」日數相分り不申以來左之通（三九才）

磔 獄門 火罪

右之罪人有之取上村於御仕置場御仕置被仰付、節三日三

夜肆置ハ様尤其」度、四奉行ハ沙汰仕不申上郡所町奉行

所格帳へ記置ハ様御定被仰付ハ様

一右之科人有之肆之内是迄取上村より番人差出來ハ得共以

來御止メ被仰付乞」食共番人被仰付肆之日限相濟引取ハ

節磔獄門火罪共死骸取捨臺ハ」夫、取片付引取ハ様被仰

付ハ様」

八

右之御沙汰書委細文化七庚午年九月之留記ニ有

一和徳町髪結万十郎子徳次郎儀當八月十四日之夜東長町金木屋久三郎方へ忍入金子式拾両一步盜取其上三両二歩和徳町勘太郎と申者へ用立ハ趣申「懸等致不届至極之者ニ付死罪之儀各沙汰申出ハ然者御刑法帳之表盜」貨百三拾文ハ上金高同様ニ而茂死活ニ不相拘様ニ付古來ハ御定被置ハ俵〔三九ウ〕「子金給渡シ割を以金壹両八拾目米壹俵拾五匁之積を以以來右百三拾メ」文ニ相當ハ様被仰付ハ隨而右徳次郎儀死罪一等を減入率五百日相濟ハ處ニ而於取上御仕置場鞭三十被行大場御擣之上十里追放被仰付ハ間追而御片付之儀可被申出ハ其外各沙汰之通被仰付ハ則濟書付一結差越ハ徳次郎へ申付方儀ハ夫々町奉行ニ而可被申付ハ以上〔一八一三〕

文化十四年十一月廿六日

高杉左兵衛

四奉行中

〔一八一二〕
文化九年十二月伺之上同十四年正月御觸出之

九

趣

一伊勢參宮拔參之儀前ハ殿重御制禁ニ有之尤所用有之他領出之分ハ願出之上御切手申受御関所罷通可申処近來御制禁を犯間道等相廻リ男女ニ不抱猥ニ拔參致し右之内病氣差合有之又ハ路用等〔四〇オ〕ニ差詰リハ者共重キ御取扱ニ相成ハ儀間々有之甚以不埒之至ニ有之ハ隨而以來村役町役ハ勿論五軒組合之者共相互ニ吟味致し決而心得違之者無之様万一間道相廻リ拔參之者於有之ハ出奔帳外之者ニ被仰付其子細ニ寄公邊へ御届申上村役町役五軒組合之者共迄急度御咎被仰付ハ隨而右之趣支配頭ニ而家別一々不洩様能ハ申含男女共心得違無之様若心得違之者於有之ハ名前年齢日共早速申出ハ様隱置脇より於相顯者村役町役五軒組合之者共重キ御咎め可被仰付ハ右之趣在町九浦寺社門前迄急度可被仰付ハ右之通惣觸相伺ハ節御添書左之通

四奉行沙汰之通尤何義ニ不寄他領出之者ハ右之通被仰付ハ

右之趣御用番大道寺宇右衛門殿ハ被仰付之

文化十四年正月十九日

〔四〇ウ〕

一村方之者共戸メ被仰付、而ハ農事之郎差障ニ相成、義も可有御座哉」ニ付以來戸メ相止め過料錢上納之儀沙汰可申上旨被仰付左へ申上、」

在方之者戸メ被仰付、而ハ農事差障并御締合ニ相成不申、以間以來戸」メ御止メ被仰付過料上納ニ被仰付輕き儀ハ御呵被仰付、様」

但弘前續并九浦町續ハ戸メ被仰付、様然共其事ニ寄過料上納被一仰付、様村方ニても郷士手代之類又ハ大場重立之者ともハ戸メニも被仰一付、様尚又村役之儀ハ其品ニ寄戸メ被仰付、様」

右過料之定

戸メ 五日ハ 過料六百文

同 十日ハ 同 九百文

同 十五日ハ 同 一メ二百文

同 廿日ハ 同 一メ五百文

同 三十日ハ 同 一メ八百文

右之通被仰付、様尤 年 公儀御定書之表并安永年中寛政年」申御刑法取捨之上四奉行沙汰被仰付、表斟酌仕リ在方戸メ御止之」上過料上納之儀其郎御沙汰申上置、尚

又戸メ代過料錢上納御定之義ハ文化五辰五月前書之通被仰付罷在、沙汰仕此段申上、以上

閏十一月 郡 奉行

町 奉行

勘定奉行
文化十四年沙汰之通

一一

一無宿之者之義追放御止メ被仰付鞭十八所拂之上之刑相犯、以者并右」已下之刑ニても盜及二度、以者其外輕き罪科、ても御取扱及三度、以者ハ」乞食手下被仰付、様右之趣被仰付、様沙汰仕此段申上、以上

三奉行

〔一八一四〕
文化十一甲戌年十一月三奉行沙汰之通

一二

一御仕置者之儀是追徒刑以上之分ハ於取上御仕置場御刑法被行來、以得共、以」來右以上之刑も其事ニ寄居村端ニ於て御仕置方之儀沙汰仕可申上之」旨御演説を以被仰付、就てハ其罪科ニ寄於居村端御仕置被仰付、ハ、深く」其処

之懲メニ相成御締相立ハ義モ可有御座尤公儀ニモ斬罪以上之分も其「品ニ寄其者之住所江差遣御刑法被行ハ御例も有之尚又御國表ニ而も早キ」頃於居村端斬罪等被行ハ義間々御座之間以來徒刑以上之分も時宜ニ隨ハ於居村端御仕置被仰付ハ様沙汰仕此段申上ハ以上

丑九月四日

三奉行

〔四二才〕

三奉行申出之通

一三

一尾太銅山并湯野澤鉛山へ苦役之類御預之儀以來御止被仰付左之通被「仰付ハ様

徒刑半年ニ相當ハハ 牢舎日數百日

同 一年ハ 同 二百日

同 一年半ハ 同 三百日

同 二年ハ 同 五百日

右之通御定被仰付ハ様尤右之罪科ニ相當リハ者御座ハ而同類懸合共御「片付被仰付其者計牢居之上道而御片付被仰付ハ此度外懸合之者共大ニ御片付被仰付ハ得共重罪之者ニ付幾日ヨリ日數何程牢居之上御片」付被仰付ハ旨牢奉行ニ而申渡ハ様被仰付ハ様沙汰仕此段申上ハ以上

一四

〔一八八〕
文化八未年十月八日

四奉行

〔四二ウ〕

沙汰之通

御家中子弟大赦難被為行譯并死刑被行ハ時節御尋

ニ付差出ハ書付之表

御家中子弟大赦難被仰付譯並死刑被行ハ時節是迄之振合御尋被「仰付ハニ付左ニ申上ハ

一冬分ニ限り死刑被行ハ儀段々僉議仕ハ得共私共ニ而死と仕ハ義早速難」相分ハ先寛政年中以來之処ハ冬分之外死刑之儀無御座ハ必竟春立ヨリ農事取中ニ付万一不順氣等ニ而ハ下々色々申唱も可有御座處ヨリ」死刑之義不申上ハ様其頃ハ合取扱來罷有ハ尤冬至前後五七日ハ御沙」汰書だに差上不申ハ様御演説も御座ハ趣前同断取扱來ハ別紙留記」之内ヨリ書取相添差上申ハ

一御家中出奔之子弟大赦難被仰付儀文化十四年御觸出御座ハ町在之者」大赦も罪之輕重ニ寄御沙汰被仰付ハ儀ニ御座ハ此段申上ハ以上

〔四、ハ〕
文化七申年四月

三奉行

〔一八〇四〕 文化元年九月十九日御城詰笹森權藏へ竹内衛士殿より

御演説之趣左之通

大赦願申上、内主を背親を捨出奔致し類寺院へ顯出ひるも御免難被_レ仰付部ニ有之の寛政十年年非常之大赦被_レ仰

付、郎も右体出奔之分ハ御_レ免之分ニ無之の間に來大赦

沙汰之節右之心薄を以沙汰申出の様被_レ仰付_レひ竹千代様

御誕生御祝儀ニ付大赦被_レ行_レ間出奔人之儀も悉大赦可被_レ

仰付之旨申觸_レ得共御家中並御給人子弟共赦難被_レ仰付町

在之者ニも其罪之輕重ニ寄赦被_レ仰付、此旨不洩_レ様可

被_レ申觸_レ以上

〔一八一三〕 文化十四年十二月廿九日 但点羽之表あり

〔年〕

張紙之表

前々追放者之儀居村ニ而も九浦町端まで鞭刑被_レ行何

里四方追放と申儀ハ弘前町より何里と申事 但居町居

村ハ右里數之外でも徘徊不相成_レ事

無札之馬者勿論凡而手段馬之儀ハ以來扱馬締役まで取押

申出_レ郎ハ為_レ勵合當人共へ被_レ下方之義伺之通相濟_レ

〔一八二六〕 文政九年戌九月二日

一流木過伐之儀ハ是迄御取立之上右木品代錢差積過料被_レ仰

付來、得共凡て過木と申内ニも過木と存なから伐取せ

又者大勢之杣子共_{〔四四オ〕}組ニ而澤入致し大都之白眼を以川

流之節沈木懸リ木迄考量之上_{〔四四オ〕}伐揃諸澤土場着之処ニ而

竿入卷立_レ得者自然過木有之外ハ全く手_{〔四四オ〕}一段木ニ無之前

条一樣之沙汰難申上_{〔四四オ〕}而過木願高之内一步

五_{〔四四オ〕}厘迄ハ御定御役錢取立木品ハ格段之御沙汰を以被_レ下

置_{〔四四オ〕}の様平均一步五厘以上之分ハ於澤所度々不吟味之処よ

り過分之過木ニ相成_レ間此上御_{〔四四オ〕}用被_レ仰付、而ハ御山御

締合ニ相拘_{〔四四オ〕}能間右過木御取上被_レ仰付、様尚又隠_{〔四四オ〕}木之分

ハ多少ニ不拘御取上木品代錢ニ差積過料被_レ仰付、様尤別

紙大_{〔四四オ〕}川原村過木ハ片付之儀も前書之形ニ仕組申上、間

夫々沙汰之通被_レ仰付、様_{〔四四オ〕}此段申上、以上

〔一八二七〕 文政十亥年正月二日 三奉行

沙汰之通

〔一行空白〕

〔四四ウ〕

一 御刑法之儀ハ冬至四五日迄御沙汰書不差出ハ様凡而冬至中見合ハ様〔一七八〇〕化七年十一月廿日笹森權藏御城詰之郎御演説を以被仰付〔一八二七〕ニ付右之「通取扱來ハ得共差支之筋間々有之ハ間度々奉伺ハ得共何れ共被仰付」無之歟〔一八二七〕文政十亥年十月廿五日藤田庄助殿御演説を以被仰付〔一八二七〕ニハ得ハ」別紙一冊相渡ハ間以來取扱方相心得ハ様よとて一冊書面左ニ

〔一七七五〕
安永四年閏十二月十二日

一 近年ハ死刑ハ御煤取以淺難相成趣ニ御座〔一七七五〕ト間公邊御定落合太右衛門を以「問合ハ處御煤取ハ十三日之由十二月ハ廿七日迄正月ハ十三日ハ死刑被行ハ様申」出ハ間右之趣違尊聽ハ處右之通被行ハハ、事ニ寄差支も可相成ハニ付此一方にも以來右之通相心得ハ様被仰渡ハ間於此地御用人中へも申付〔一七八四〕ニ付於「其御地も夫々可被仰付」右之通御家老中御用狀ニ而申來ハ事

〔一七八四〕
天明四年十一月十日

〔四五オ〕

冬至中死刑ハ勿論都而之凶事向御用御取扱以來斟酌可被成旨今日被仰出ハ

〔一七八六〕
天明六年四月廿六日

一 四奉行申出ハ去十一月死刑之者沙汰仕申上〔一七八六〕ト、処當二月ニ至可被仰付旨「被仰付ト然ハ凡而死刑之分春夏ニ被行ハ而ハ天氣不勝にも相成ハ趣世」俗前々共ニ申唱ハ而人氣ニも相拘ハ間以來秋村納淺死刑被行ハ様被仰「付度旨去春御内意申上ト如何被仰付哉御内意申上ハ旨申出有之當秋」村納後死刑被行ハ様被仰付ト以來ト申出ハ得共其儀ハ不被為御沙汰」旨申遣之

〔一七九二〕
寛政四年十一月九日

一 冬至中死刑ハ勿論都而之凶事向御用御取扱以來御斟酌可被成旨天〔一七八四〕「明四年十一月被仰出ト、処又々今日被仰出トハ右冬至三日前より冬至中」御刑法不被仰付旨尤凶事向書付差出ト、議ハ冬至中トても不苦ハ」旨以來右之通相心得ハ様被仰付旨多膳主水被申通ハ」右之通一冊御渡ニ付此年より冬至中ニ而も凡而之御沙汰

書御用所へ」差上り事左に得者御用所ニ而沙汰之表御見合被置冬至後ニ夫々御片付」被為成旨御演説ニ御座」事」

一評定所於白砂御徒目付出席之上以來人別調役口聞僉議方被仰付」以上

〔一八二八〕
文政十一年十一月十五日

一九 張紙之表

一公事訴訟願事

一詮議事

右六ヶ月ニ而相濟有之由ハ、何故不相濟誰月番ニ而末相濟由段」其度ミ六ヶ月ニ而書付可被差出由尤其以後右相濟由ハ、其段可相達由」

寅二月

右之通被仰付」已上

二月十四日

〔七行空白〕

〔四六ウ〕

『旧津輕藩 刑法』は、明治四四年から大正四年にかけて小野士格氏⁽³⁷⁾により作成された弘前市史編纂資料のうち第二十四冊に当る写本である。⁽³⁸⁾

その体裁は、大きさ縦二四・三、横一六・七センチメートルで、表紙は表・裏とも反古紙を裏返して用い、本文は左下隅に手塚製と印刷する二五行（版心を除き片面二二行）の藍色刷縦罫紙に墨書し袋綴したもので、目録三丁、本文四三丁から成り、墨書・朱書により訂正・加筆・削除が多くみられる。全文同筆で、小野氏の手になるものである。

朱筆等での訂正は、「已上」を「以上」に、「いたし」を「致し」に、「もの」を「者」に、「て」を「而」に、「へ」を「得」に改めている。前者の用字は⑧『寛政律』（その六）と⑩『寛政改正 刑律』にのみ見られ、専ら後者の用字が見られるのは、②『御刑法書之写』、⑤『寛政律』（その三）、⑦『寛政律』（その五）、⑫『法律秘略』などである。④本に極めて近いのは、⑬のようなが、必ずしも全てが一致するのではない。あるいは複数の本を用いているのかもしれない。今後の検討に付したい。

本書の底本は、既に紹介した①京大本『御刑法牒』、②『御刑法書之写』、③『寛政律』（その一）、④『寛政律』（その

本 書	①御刑法牒	②御刑法書 之写	③寛政律(-)	④寛政律(-)
一 二 三 四 五 六 七 八 九	○	○	×	×
一〇	○	○	○	×
一一	○	○	○	×
一二	○	○	○	×
一三	○	○	○	×
一四	○	○	○	×
一五	○	○	○	×
一六	○	○	○	×
一七	○	○	○	×
一八	○	○	○	×
一九	○	○	○	×
二〇	○	○	○	×
二一	○	○	○	×
二二	○	○	○	×
二三	○	○	○	×
二四	○	○	○	×
二五	○	○	○	×
二六	○	○	○	×
二七	○	○	○	×
二八	○	○	○	×
二九	○	○	○	×
三〇	○	○	○	×
三一	○	○	○	×
三二	○	○	○	×
三三	○	○	○	×
三四	○	○	○	×
三五	○	○	○	×
三六	○	○	○	×
三七	○	○	○	×
三八	○	○	○	×
三九	○	○	○	×
四〇	○	○	○	×
四一	○	○	○	×
四二	○	○	○	×
四三	○	○	○	×
四四	○	○	○	×
四五	○	○	○	×
四六	○	○	○	×
四七	○	○	○	×
四八	○	○	○	×
四九	○	○	○	×
五〇	○	○	○	×
五一	○	○	○	×
五二	○	○	○	×
五三	○	○	○	×
五四	○	○	○	×
五五	○	○	○	×
五六	○	○	○	×
五七	○	○	○	×
五八	○	○	○	×
五九	○	○	○	×
六〇	○	○	○	×
六一	○	○	○	×
六二	○	○	○	×
六三	○	○	○	×
六四	○	○	○	×
六五	○	○	○	×
六六	○	○	○	×
六七	○	○	○	×
六八	○	○	○	×
六九	○	○	○	×
七〇	○	○	○	×
七一	○	○	○	×
七二	○	○	○	×
七三	○	○	○	×
七四	○	○	○	×
七五	○	○	○	×
七六	○	○	○	×
七七	○	○	○	×
七八	○	○	○	×
七九	○	○	○	×
八〇	○	○	○	×
八一	○	○	○	×
八二	○	○	○	×
八三	○	○	○	×
八四	○	○	○	×
八五	○	○	○	×
八六	○	○	○	×
八七	○	○	○	×
八八	○	○	○	×
八九	○	○	○	×
九〇	○	○	○	×
九一	○	○	○	×
九二	○	○	○	×
九三	○	○	○	×
九四	○	○	○	×
九五	○	○	○	×
九六	○	○	○	×
九七	○	○	○	×
九八	○	○	○	×
九九	○	○	○	×
一〇〇	○	○	○	×

(二)と同様に、本文の後に「追加」として、関連する諸令を附加している。その内容には出入りがあり、より詳細な分析を要するが、おおまかに五冊の対応関係を示しておこう。

①には番号を付していないので、対応項目のある分は○で示した。表を見ると、①および③に対応する項目が多いが、本書の底本でないことは明らかである。なお「追加」の直前にある「太田養益……」の項は、④の一に対応する。これらの諸項の収載にみられる問題点については、将来の課題としたい。
なお八六が一〇〇の後に置かれるのは、他には⑤『寛政律』(その三)で、貼紙の形である。

註(37)

『青森県人名大事典』(東奥日報社、昭和四四年四月)の相沢文藏氏執筆記事では以下の通り(一二五―六頁)。
小野士格(おの・しかく) 生没年不詳。弘前市馬屋町出身、藩士の出。初め幸六と名のる。明治一三年青森師範学校卒業各地の小学校に勤務したのち青森新町小学校長から東奥義塾教師に転じた。明治四三年教職をひいて東奥日報社に入社し弘前支局勤務のかたわら弘前市の委嘱により市史編さんに従ったが、個人作業としては手にあまり、成果をみないことで市会の問題となったこともあり、ついに資料収集に終った。大正三年南津軽郡藤崎村長に迎えられ翌年まで勤めたが再び私立弘前女学校に教鞭をとった。そこから福島県立福島中学校に転じさらに樺太に渡ってその中学校に勤めるなどその出処多彩な人物であった。その収集した資料は散逸したが一部は弘前図書館に保管されている。大正二年発足した陸奥史談会創設主唱者の一人でもあ

った。

なお、安西如鳩・成田彦市共編『改元東奥人名録』（大正二年十一月）には、

小野士格 舊名を宰六といふ、明治十三年二月青森縣師範學校中等師範科を卒業し東奥義塾教諭、青森新町小學校長、青森縣師範學校訓導其他各地の小學校に奉職すること多年、又新聞記者となり明治四十一年より弘前市の嘱託を受け弘前市史編纂に従事し居れり、同市馬屋町に住す。

(七六頁)

とあり、まさに市史編纂作業中の記事である。因みに、かが市史概纂作業を開始したのは、註(38)の記事を考慮すると、この明治四十一年よりとする方が当っているようである。

(38) 『弘前図書館郷土資料目録 五 弘前図書館一般郷土資料目録』（弘前市立弘前図書館、昭和四〇年一〇月）には次のように記載している（二六―二八頁）。

〔弘前市史編纂資料〕 小野士格編

明治四四～大正四写（一九一―一五） 一一八冊

註：明治四二年より大正四年まで小野士格が市より編纂を委嘱されて収集したもの

- 第一 市史編纂考証目次一 附要項材料
- 第二―四 市史編纂材料一―三 附考証材料の蒐集
- 第五 弘前市史材料（津軽家系譜 小伝）
- 第六 弘前市史材料（変災）

- 第七 弘前市史材料（軍事ニ関スル件）
- 第八 質座材料
- 第九 学事関係（弘前医学校ニ関スル件 其他）
- 第一〇 米ニ関する問題
- 第一一 廻米ニ関スル件
- 第一二 酒造関係材料
- 第一三 弘前市史材料一（高岡町派立 高岡城築 高岡町割 掘越より移転 高岡を弘前と改む 市中木戸を設く 南溜池の開鑿 流人預人 茂森山の削平 元和の凶歉 移封の内命 天守雷火 藩士亂轢 切支丹 寛永の大震 寛永の飢饉 勅進相撲 乙食頭丁助）
- 第一四 弘前市史材料二（市長 版籍奉還 戸口 弘前大平城沿革概略（佐藤弥六） 弘前出張所及支庁 自治制 施行 市ノ区域沿革）
- 第一五 弘前市史材料三（時太鼓 消防組 紙漉 秤ノ製 造 手織木綿 菅笠 神社）
- 第一六 材料甲
- 第一七 材料乙
- 第一八、一九 維新以後抄録一、二
- 第二〇 雑抄
- 第二一 波岡家ニ関する抄録
- 第二二 弘前藩政事典刊誌
- 第二三 寛政御仕向之覚 康済余令抄
- 第二四 旧津軽藩刑法
- 第二五 改革御用留拔書（慶応四年） 朝廷御書付拔書

(明治元年)

- 第二六 御一新御用留 (明治二年) 按察使御用留 (明治二年) 松前御用留 (明治二年)
- 第二七 招魂祭御用留写 (明治二年)
- 第二八 大坂御屋敷一件 (安永九年)
- 第二九 松前警備一件 (寛政一、文政)
- 第三〇 藩時代に於ける意見書類拔萃
- 第三一、三二 町年寄並名主御用留抄録一、二
- 第三三 市会関係日記抄録 (宮川富三郎)
- 第三四 市費 (明治二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)
- 第三五 国税県税 租税負担額 市費歳出入
- 第三六 青森県租税誌鈔
- 第三七、三九 興業意見 卷五、六、二〇
- 第四〇 「青森市沿革史」目録集
- 第四一、四七 津軽旧日記抄一、七
- 第四八 津軽旧日記抄八 (郷村帳 其他)
- 第四九、五〇 津軽旧日記抄九、一〇
- 第五一、七〇 御日記抄 延宝三年、元禄二、二年六月
- 第七一 弘前日記抜書 明治元年
- 第七二 県会関係布達綴 (明治一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)
- 第七三 町村関係布達綴 (明治一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)
- 第七四 戸長関係布達綴 (明治一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第七五 稅務関係布達綴 (明治一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第七六 地課金・戸課金・民費總計関係布達綴 (明治九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)

(一一)

- 第七七 町村費規則布達綴 (明治一七、一八、一九)
- 第七八 裁判所関係布達綴 (明治九、一〇、一一)
- 第七九 違式註違条例違警罪布達綴 (明治二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)
- 第八〇 警察署関係布達綴 (明治一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第八一 郡区町村編制法・大小区廃止郡制更正・町村分合 改称・医務医術・惣代人・郵便電信関係布達綴 (明治九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第八二 社倉・貯穀・備荒貯蓄・土木費関係布達綴 (明治九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第八三、八五 学事関係布達綴 (明治九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第八六 青森県布達綴雜件 (明治一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)
- 第八七 県布令目録
- 第八八 御布告抜書 (明治元年) 朝廷御書付抜書 (明治元年) 県内布告要領抜書 (明治元年、四年)
- 第八九 備忘録目録
- 第九〇、九五 備忘録一、六
- 第九六 遠目鏡 卷一、二 (山形字兵衛 (長年))
- 第九七 天保凶年記録
- 第九八 天保凶歳日記
- 第九九 曹洞諸寺院縁起志 (釈黙道) 浄土真宗一派縁起 (釈浄瑞)
- 第一〇〇 津軽年代考記 (都合森甚之丞 (正祥)) 弘藩名数考
- 第一〇一 東日流記 (岩木山由来 東日流由来記 津軽始の古事抜書)

- 第一〇二 東日流記（高屋豊前）
 第一〇三 永祿日記
 第一〇四 津軽興業誌（藤田貞元）
 第一〇五 津軽事実考（小山内清隆）
 第一〇六 東北風談（肝付兼武）
 第一〇七、一〇八 一木萩抄（鶴川盛矩編）
 第一〇九 藩日記抄（信寿公儀登城 百姓の飲食制限 廻
 堰大溜池普請 うとうやすかたの由来其他 製紙並緒仕
 立 馬喰町にて馬売買 茶種茶畑 赫土試用 御用金
 長勝寺に於ける光信公の像 南溜池 新田開墾成功其他
 開墾に関する件々 鉾山 馬 赫土 開墾 職工召抱
 菊池四郎左衛門申立書 細辛 くそらず油 尾太銅山）
 第一一〇 御目付動方雑集抄録 江戸表動方御定書
 第一一一 岩見日記抜書
 第一一二 俗談争話抄（三谷慶甫（徳貞））
 第一一三 平家音楽史抄（館山漸之進）
 第一一四 市史編纂各所往復書類綴（弘前市役所）
 第一一五 旧弘前藩（山林法（山法見聞志記（浅井治左衛門）
 雑書）
 第一一六 弘前市史材料（神社仏閣）
 第一一七 無超記
 第一一八 弘前市史材料目録

この資料群は目録の請求記号K二三〇―一であるが、現在K二三一―ヒロに改められている。膨大な資料群であるが、ほとんどが個人による筆写で、法制史に直接かかわる

資料も少くない。なお、中止された弘前市史は、戦後新たに編成された弘前市史編纂委員会により『弘前市史 藩政編』（昭和三八年）、『同 明治・大正・昭和編』（同三九年）として完成した。なおこの資料の第二二については、前稿（十六）で若干触れた（一九二頁）。

表紙に用いられた紙の裏は次のように印刷されている。

石幡貞子幹著（全四冊）
東 嶽 文 鈔
東京 石幡 氏 蔵 版

書籍の包紙を裏返して袋綴にし、表紙としたものである。裏表紙は、反古を裏返したものであるが、その内容は次の通りである。用紙は片面一三行の縦罫紙で中央折目部の版心下方に「青森縣立番産學校」と印刷するもので、以下のような記録がみられる。

寛政律の写本については、これまで紹介した諸本のほかに、国立史料館所蔵『津軽制度略』所収本およびこのたび一九九四年三月一〇日から公開され利用可能となった弘前市立図書館所蔵八木橋文庫の教冊がある。これらについては、目下調査中で

あるので、しばらく時を措くことにして、将来の紹介を期したい。ひきつづいて文化律の諸本の紹介を終えたのちに「寛政律・続」として紹介できよう。

卒業生ノ状況
畜産科

計	未定	死亡	不明	兵役	海外渡航	研学	実業	獣医開業	私立牧場員	産牛馬研究員	教員	官庁奉職
〔朱〕 一〇一 一八	〔朱〕 四三 一							一	一	一		五
一〇一 一六五	一	一						四		二		七
一〇一 二八					一	一	五	二			一	八
一〇一 八四	〔朱抹〕 一						一	二		三		八
一〇一 二六				四	二	一	九	一	二			七
一〇一 六六	〔朱〕 一						一	二	一	三		八
一〇一 四五				二	二	一	〇	二	二			六
一〇一 四七	〔朱〕 一			五	二		七	一	一			十
一〇一 五〇	一					二	一	四		三		九
一〇一 九八	一	六	一	一	一	三	七	七	六	三	一	四
												〔六〕 八

〔補訂2〕『隠商過料定牒』

このたび 公刊された黒瀧十二郎著『津軽藩政時代の生活』
 (青森県の文化シリーズ 北方新社 一九九三年一〇月)には一三六
 頁に本書の表紙と第一丁表の写真が掲載され、弘前図書館蔵
 「八木橋文庫」との注記が施されていた。まさしく本稿の(五)
 で青森県立図書館所蔵の電子複写本として紹介したのと同一本
 らしい。五月の連休を利用して、たまたま同館を訪れた際に調査
 室で『八木橋文庫目録』(弘前市立図書館 平成五年三月)を検索
 したが、載せられていない。同室のスタッフに調べていただい
 たが、やはり所在は不明であった。ところが、偶然にも著者の
 黒瀧氏が来室しておられたので、早速お尋ねしたところ、先年
 故八木橋武実氏から電子複写本を受贈されたので、原本は当然
 八木橋文庫に所在すると信じておられた由であった。

たしかに黒瀧氏は先著にひきつづき最近公刊された論文集
 『日本近世の法と民衆』(高科書店 一九九四年三月)でも、寛政
 「八年二月に隠商過料定牒が定められた。」(一三六頁)と記さ
 れた文の註として、次のように本書を紹介しておられる。

八木橋文庫蔵(市立弘前図書館蔵)複写本。これは原本と思
 われるもののコピーである。表紙に「寛政八丙辰年二月 隠
 商過料定牒 戸数方」とあり、寛政五年六月の十六ヵ条、同

六年八月の三ヵ条、同七年十一月の三ヵ条から構成されてい
 る。これは市立弘前図書館蔵の「御刑法書之写 全」(年代
 不明)中に見える「隠商過料定」よりも詳細で良質の史料で
 ある。(一八八頁)

その翌日、黒瀧氏所蔵の電子複写本のコピーをいただき、帰
 宅後に手元の三浦本コピーと引合わせた結果、いずれも同一本
 のコピーであることが判明した。もしこの原本があれば、藩庁
 の戸数方であった本として、正本の一冊といえよう。残念なが
 ら、ふたたび幻の本として行方を追求せざるをえない。はたし
 て八木橋氏が原本をいったんは所持しておられたのか、それと
 も三浦・八木橋両氏とも第三者所蔵の原本のコピーがある機会
 に入手されたのであろうか。後者ではないかと推測する。

黒瀧氏の指摘された『御刑法書之写』については、すでに本
 稿(二)で紹介したとおりであり、法学論集第七号一六五頁以
 下に「隠家業過料定」として収めているが、丑六月条はほぼ同
 一で、寅八月条はやや内容を異にし、後の卯十一月条を全く欠
 く。また岩見文庫本『隠商過料定牒』との異動は(五)で示し
 ておいた(法学論集第十三号一三六頁以下)。

さらに(十六)『刑律』では本文に続いて「隠商過料定」が
 あり、末尾に「寛政五年癸丑六月」とある(第二十九号一八六・

一八七頁)。また卯十一月の法文中に「寛政四子年十月」の記事もみえることから、丑六月を寛政五年六月、寅八月を同六年八月、卯十一月を同七年十一月とされた黒龍氏の指摘は妥当であろう。

本項は、先の(六)に記した三浦本に関する補記(法学論集第十四号一八七・一八八頁)の続きをなすものである。

このたびの検討に際して、黒龍氏よりご指摘をうけたので、前稿の訂正をおこなう。

訂正 (五) 法学論集第十三号

一三七頁上段 二〇行目 (空白) ↓ 覚

一三九頁上段 一行目 (空白) ↓ 「七オ」

一三九頁上段 二行目 「七オ」 ↓ (空白)

